

小恒河沙

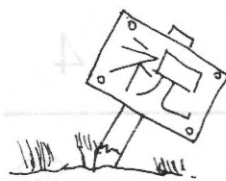


NO. 3

▷ KANTOGEN ▷ R,

四月になると空も変わり、それとともに学園にも新しい風が吹き込んでくる。三〇〇〇人もの新生生はいったい何を求め何を考えているのだろうか。「大学で何をするつもりですか。」と聞かれて、君達、いや一・二年生であっても、一体どれだけの人が明確に答えることが出来るだろうか。

新生生を迎えて



「新しい」ということは、それだけで一つの力になると思う。しかし今の時代は、その「新らしさ」の質が問われる時代なのではないだろうか。新生生であるから、というだけでは新しさの保障にならないのである。近頃の学生は質が落ちた、と言われる。今、真の「新らしさ」で対峙してほしい。

目次

* 巻頭言 1

* 特集 私にとつての大学

私の大学生活 乙訓 高／駒場の四季 山崎信人／散漫な
雑感「東大」って何か、点取り虫考 末中未知雄／どうしよ
う？ 小池路子／ぼくが一年間やってきたことをふりかえ
る 西川喜紀／火遊びのすすめ 葉月よき子／思ったこと
少し 千明賢治／私と大学と現在 恒屋淳一／物理屋の独
白 小出昭一郎

4

* 随想 苦い体験 16

* 編集部座談会

今……自らを見つめ直すとき 17

* 読者から 独所感 総文 山樹浩一 26

もつと二元氣になろうよ うのはるか 27

* 摩訶庵仁庵 鋭醉の 鋭醉独言 28

* ポエムコーナー 29

* 真の東大変革とは何か

上月健輔 30

処分に反対する連絡会に参加するものとして

* 映画評論 若松の最近 宮台真司 34

* モーパッサン——自然主義の落とし子として 迫田英典 36

* 懸賞つき 奇怪 クロスワードパズル 47 前号の解答……… 35

特集 私にとつての大学

異常気象などといわれながらも、春のぬくもりをたしかに感じる今日この頃である。新たな春を迎えて、みんなそれぞれの思いをいだいていることだろう。編集部では、駒場に身を置いて生活している何人かの人に「あなたにとって大学とは？」と問いかけてみた。

私の大学生活

乙訓 高

今まで、僕が生きてきた19年間の人生の中で、この一年の大学生活はたいへん異常だったように思える。大学生活で、勉強の占めた割合といたら、せいせい1%ぐらいではないだろうか。夏・秋・冬休みと長期休暇は3回はかりあったが、教科書・ノートを見た時間などは無に近い。

それに反比例するように、娯楽時間は勉強時間の100倍は楽に越えているだろう。入った同好会の遊びの雰囲気にも口にもまきこまれ、パソコンはするし、マジシャンを覚え、多くの時間を費やした。雀球は無論のことであり、テレビゲームにドッボールこともしくはしばだつた。お酒も生活の中に侵入してきた。しかし、このようなことにおぼれて、いったいどのような意味があるのか。振り返ってみると、何かムナしい一年であったような気がしてならない。

その中でも唯一の収穫といえば、同好会の中でテニスに全力を注ぐとまでは言えなくとも十分に熱中できたことだと思う。これによって、一時間目の人文社会を犠牲にしてみました。たことも見のかすことのできない専攻ではあるが、これ程テニスに集中できるときは本郷に行つてからはまずないと思われるので、僕としては満足している。僕の青春の象徴であるテニスだけは、来年も時間の許すかぎりやっけていきたい。

このように、実験・体育を含めても週平均3〜5コマの大学生活を送ってきた僕に、一月になつてから登場してきた大問題が、「留年」である。理科系の場合、三年に上がる時、いわゆる「進振り」があるので、その時点での平均点を考えると無視できない問題であった。まあ同じ同好会のかわいい女の子は2年になつちやうけど、もう一度、一からやり直そうと「留年」を最終的に決断したのは一月下旬。クラスの人が試験でフーフー言っている時にのんびりテニスをやっけられる状態だったが、来年のことを思うと多少不安にもなつた。現在は、19年間の人生の中で異常だったこの一年を、将来振り返ってみるとこの一年だけが異常だったと思えるように来年から頑張りたいと心に堅く誓っているのである。(BSOI)

駒場の四季

山崎 信人

今は昔、あまたのをのこをとめありけり。身を、要ある者に思ひなして、京にはあらで、駒場の森をさして行きにけり。ころは弥生の事なれば、親鬼に連れられしをのこたち、神田駿河台なる明神に詣で、東国の物の怪退治に行きにけり。(日本古典文学大系)

試験も終わり、駒場の街にもようやく遅い春がおとすれようとしています。はや入学してから一年がすぎようとしています。いや、年月とは早いものです。とくに遊び呆けてくらしている者にとつては……。なごくだらぬことを思いつつ駒場の四季を私の思いつくままに書いてみようと思ひます。

春の予感(四月と六月)

やつと入試もおわり、目の前が開け、僕達は何でもできると思ひあがっている時期。春になって、小川も流れだすころになると、オタマジャクシと共に、各地で合コンなるものが頭を出してきます。東大生の看板を信じて、実力もないのに、しくってもしくってこそれは「俺にあう子はいない」などと正当化してよろこんでいるしあわせなひととき。

ひと夏の経験(七・八月)

希望にもえた春はうたかたのごときえさり、地方出身者はひとり汽車にのり故郷に帰るのです。そこでは、当初こそ意気揚々としているものの、やがてそれも消え、俺は何なんだろうと迷いはじめるとき。東大生万能の伝説も姿を隠し、はじめて人はむなしさを感

じるのです。

異秋期(九月と十一月)

試験があり、これまでの習慣からなんとなく勉強し、まあまあ那点をとつてみたもののむなしさだけがつきまといつてくる時季。そして秘れみー目ざめの時。ここで二とおりに別れます。生活にも慣れ自立して新生活に大きくははたいていくタイプと、むなしさに耐えきれなかったり、それにひたることにほろ苦いよろこびをみいだすタイプ。七国の遊戯は伝染病のように駒場をぞめていきます。後者の人は何かにすがりたいと、駒場祭にのめりこんでいきます。

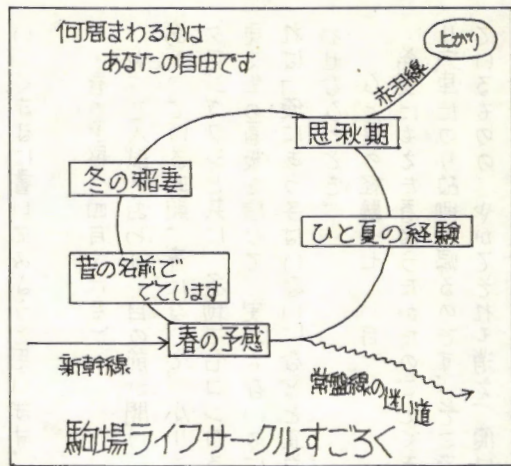
冬の稲妻(十二月と二月)

駒場祭の陶酔もさめ、さりとて勉強する気もちも前期とは違つてなく、時だけがさびしく窓の外をとりすぎていく時期。しかし、人はこの季節、青い鳥は手をさしのべる者だけにほほえむことに気づくのです。

昔の名前ででていきます(三月)

一年がすぎ、かつてのように虚名に生きることもなく、やけに大人びたひよわな若鶏たちがひとり歩きをはじめるとき。その前途に幸多からんことを……

私の独断と偏見のもとに、一般的駒場生の四季をつづつてみました。思ひますに東大生という入種は、入学に際して生活の断絶が大きいのです。たいていの人は大学へ入つても、これまでの生活と連続してその生活にはいつていきますが、かの入々は一種趣を異にします。とくに、有名進学校出身の人は一応東大入学を区切りとし、それをめざして一途にはげんできた人が多いと思われまふ。区切りですから、そこからあとのことは、これから考えなければなりません。そこでむなしさを感ずると、以前との連続性という地盤がないために、よけいむなしさの増幅がおこなわれるのです。ところで、今や一年がすぎはじめで自分の人生を自力で歩みはじめた時、



すぎて目をまわした人も、いつかは赤羽線がみつけれられるでしょう。あなたほどの道をえらぶが、それはあなた自身の問題です。とくに世間から保護されがちなプロライターの若鶏たちにとって、いや、また阿呆なことを書いてしまいました。どうも、教務課より体育課などというものが支配するクラブ生をやっていると、阿呆になるものです。一たんつまらんことをいうと、さつとあびせられる「おもしろい」の声、ああ私にはあの冷たい声の監視が必事なのです。あしたも試合があるから、今夜もビール飲んでねよ。それではねー。おやすみなさい。(53 LI)

一般的駒場生の四季をつづつたのが上の図です。山手線を何回かその人なりにまわり、赤羽線をおって、上りへ行きましよう。中にごく一部、今だにめざめず、新幹線からそのまます常盤線の迷い道へいや、迷わないからまっすぐでしようか？へ行ってしまふ人もいますね。なお、このすころくは恋愛すころくにもなりますのでみんな楽しんで遊びましよう。まわり

散漫な雑感 「東大」って何か・点取り虫考

末中 未知雄

「東大ってどんな所ですか。」父の職場で働く、自分と同年の或る人に質問され、私はどう答えてよいものかわからなかった。「東大」に行っているからといって偉いわけでもない。当然のように親のもとで暮らしながら、中途半端な生活を送っている自分が、同年でありながら職場へ入って、ともかくも自立している人間から、かえって、尊敬にも近いような目で見つめられる。どうしようもない恥しさ、何を言っても、所詮フネかじりの甘えなのでないかという気持ち。もちろん相手はそんな事まで考えているのではないし、結構安易に過ごしているのかもしれない。けれど、大学生でいること、東大生であることの「引け目」を感じることが自分にはどうしようもなくある。優越感の裏がえしにすぎないといへば、そうなのかもしれないが。

★

私は、最近たまたま紙面をにぎわした「開成高」の卒業生である。報道で接する「母校」の像に、誇張・大騒ぎといった点は別にして「どういう所があるな」と思っ一方、どうも異和感を感じる所もある。しかし、一体開成高とは何か、また東大とは何か。

東大って何たるうか。施設をいうのか、講義をいうのか、教官か、学生か、試験だろうか。外側から見たイメージ？ 内側から？ 人によって違っだろう。その総和？ 共通点？ 学生なり教官なりの大学生生活の全部？ 考え方、行動の総体？ 社会に於ける

社会的、または歴史的な僕らの被拘束性?……単にあけるのはバカみたいだけど、『開成高』事件みたいなのが起きた時、こんな問題はやたらと出てくる。

けれど自分は自分としてしか生きていない。東大とは何かといっても、自分の思うのは、駒場に通っている自分と、自分が見るまわりの姿だ。それが東大かどうかはわからない。いやにもったいをつけて書いたが当り前の話だ。悲しいことであるかもしれない。

★
小学校・中学校の頃、自分は点取り虫ではないし、決してならなとも思っていた。今でもそんな気持ちはある。けれど、自分も結局、点を取るのが好きになってしまったのだなという気がする。

大学入試とも別れて、Oxを気にするような勉強は卒業するのだと決めていたはずだったが、一年経っての大学の試験、また同じように「あの教科はどれくらい」「やっぱりAが多少ないといけないのでは」とせこせこ暗記勉強している自分を見出す。勉強は大切暗記だって必要なことではある。しかし、そんな勉強ばかりが必要だという風にさせる考えが、僕等にはどうしようもなく出来てしまっている。

入試前の模擬試験・成績・受験などの話が、仲間との会話の中でよく出るのではないだろうか。自分が以前はいかに出来たか、または、大してできないにもかかわらず、いかに試験をくぐり抜けたか。(もちろん、そんなに直接的な云い方はしない)それぞれが、目を輝かせて話し始める。「社会を自分たちの手で、作り変えてゆくんだ」と言うような人たちが、こんな話をし始めるのも幾度か聞いた。そして、はじめはつまらないと思っている私自身も、そのうち何か自分のことを言ってみたくなくなってくる。

それは必ずしも悪いことではないのかも知れない。「お爺ちゃんが若い頃、戦争でどんなに危い所をくぐり抜けてきたか……僕らが昔の『いくさ話』に興じることがあっても不思議ではない。けれど、

まだ二十そこそこの若者が、そんなにたむたむ『いくさ話』をタネにするというのはちょっと奇妙な気がする。学生運動がこれだけありながら入試制度への批判の運動はほとんどない。教育の『流弊』を知り、さらには弁護士になって社会変革をするというような人が、それではとびつくるのは、他の人と変わらぬただの受験勉強である。こんな事と考え合わせたとき、それは、単なる個人のひねくれた言いがかりとも言えないような気がする。

★
最近気附いた事。話は飛ぶが、小学校一年向けの雑誌をみていて驚かされたのは、「知能テスト」「文字の練習」「数の計算」そんな種類の紙面や附録がずいぶん多くなったことだ。以前、子が選んで親が(しぶしぶ)買ったものは、今では親が、子のために買ってやる、そうやって売っていく、という風に変わってきているのかも知れない。

僕等にとって、進学の為に塾へ行かせる事は(自分がそうだった)かは別として考えられることで、「乱塾時代」と言っても目新しい事とは思えない。けれど、僕等の時には取る程度特別だった事は、今、僕等が考える以上に深く、広く、それこそ「小学二年生」にまで浸透しているとしたらどうだろう。点数の好きな人間がさらに広がって来るのなら、僕等が自分自身におぼろげながら感じている僕等自身の「ひずみ」は、社会にとってはおもろい、東大生にとっても、まだまだこれからが本番なのかもしれない。このことは考えられる。

(531)

どうしてよ。。

小池 路子

高校時代、ひたすらクラブ活動に熱中し、気がついた時には浪人

が決定していた、という私。予備校には友人もたくさんいたし、決して悲慘な日々を送っていたわけでもないが、それでも精神的な圧迫は強く、一日も早く浪人生活からはおさらばしたいと願っていた。当時の私にとって、大学とはまさにユートピアであり、ガンダーラのような所であった。

大学生になったら、一点二点を気にするような勉強からは足を洗って、好きな勉強を好きなだけやるんだ。そう息込んでいた。しかし現実には、と今の私を振りかえらなう……。なんと怠惰な生活を送っていることか。あれほど勉強にうちこもうと思っていたにもかかわらず、サボリは日常茶飯事となり、さらにはサボルことに対して全く罪悪感を感ぜなくなってきた。かといって完全にワルに徹しきることができず、真面目に講義に聞き入っている他の女子学生を横目で見ると、生意気にもあせりを感じ、試験前ともなれば一人前にノートの心配をする始末。我ながら突にかっこ悪いと思っっている。大学というのは、実は私の考えていたような理想郷ではないということだが、最近はずきりとわかつてきた。自分の方から何かを求めようとする積極さがなければ、なんとなく事もなげくすごしている所、見ようによっては非常に冷たいシビアな所なのだ。私はいえは、別に何々を勉強したい、というはずきりした目標を持って大学に入學したわけでもなく、一番暇そうな文二にでも行けば時間もあることだし、何か自分のやりたいことに出会えるのではないかと安易な予想のもとに入學したわけで当然といえは当然のことながら、一年間たった今でも、自分が何学部にすみたいかもわからぬ状態。幸いクラスマートの女子3人か非常におもしろい人達で、適度に(過度だ、といううわさもあろうだが)仲良く、おもしろおもしろくやってはいるものの、これだけで果たしていいのかなあ、と自問することも時々ある。専門課目をはじめたら、もっとまじめになろう、本郷へ行ったら、しっかりしよう、と今は思っているが、今までの経験からして、その決意もあやしいものだ。結局こと

私に関する限り、大学の意義を勉学に求めることは不可能であるようだ。ではサークル活動は、というと、これまた軟弱であり、こつこつしているサークルの片方では、全くのユレーイ的存在になり果している。もう一方のサークルは、テニスの同好会なのだが、テニス自体に不満はないが、どうも雰囲気は今ひとつとけこめず、したがって活動に没頭することもできずにいる。こうやって考えてくると、今の私には、大学生活の内には何一つ自分をかけられるものが見出せないような気がしてくる。しかし日々の生活にこれといった不満も感じておらず、かえって不安な気分だ。もうこうなったら、大学卒業後に焦点をあわせ、可愛い女になって人並みに花嫁となることを目標にしようと思う今日この頃。それが女にとって最大の幸せなんだ、と自分に言い聞かせ、あと3年間、まわりの流れにさからわず、かろうじておいていかなれない程度のところで、なんとかやっていこうか、とも思っている。(53LII)

ぼくが一年間 やってきたことをふりかえる

西川 喜紀

一年前を思いおこしてみます。ぼくは、大学に何をしようと思っ
て入ってきたのでしよう。オリエンテーションの時のアンケートに
は、「自分の興味をもつ学問分野について、理解を深めてみたい」
などと書きはしましたが、はつきり言って、何も考えていなかった
というのが実情でしょう。というのは、ぼくには、高校時代一つ気
かりなことがあったからです。ぼくは、一年浪人してまずから、
つまりそれは、約一年半ほど、ずつと頭から離れなかつたわけです。
そのことに決着がつくまで、ぼくの受験生活は終わらない、大学生

活は始まらない、と考えていました。結局、それは「ふられる」という結果に終わったんですけど、そういうわけで、5月の初め頃には「ぼくは、さあ、何をやるうかな、などと考えていました。」

高校時代の友達で現役で東大に入っているのがラゲビーをやっている、そいつに誘われたり、高校の時、若干やっていったバスケットなんかに魅力を感じたり、やはり自分は運動系よりも、ということ、合唱をやるうかななどと考えてもいました。

そんな時、これも高校の時の友人のつながりで「自治委員合宿」というものに出てくれ、と言われ、何の気なしにそれに参加しました。そこで第5期自治会常任委員会の書記長と知りあいになり、数日後呼び出されて、「常任委員をやってほしい」と言われました。さすがにあまりいい気はしませんでした、それまでの常任委員の一部が本郷に行ってしまった後の補欠ということ、任期も6月までだということだし、スポーツ大会や5月シンポなどの事務的な仕事くらいなら、高校の時、体育祭実行委員会の会計をやったこともあるし、ということ、まあ、ひきうけよう、ということになりました。

そして、スポーツ大会実行委員会の事務局長をやり始めました。自分で言うのも何ですが、ぼくは比較的責任感の強い方で、毎朝8時20分に登校して、バレーコートと水4体育館をあける、用具を貸し出す、審判をやる、記録する、などということをめげずに続けました。

そうとうにぎつい仕事でしたが、一つ一つ試合が終わって、優勝チームが出てくるころになると、それなりの充実感があって、賞品のビール券をわたす時、これでクラスの親睦が深められたらうと思つと嬉しくなつたりしていました。

そうこうしているうちに、第56期の自治会の任期も切れました。ところが、今度は、第57期の自治会の委員長に選ばれて、「何とか常任委員を続けてくれ」と言われ、最初は断わるうと思つてい

たんですが、駒場祭もなかなか楽しそうだったので、ひきうけることにしました。

しかし、ぼくが中国語合宿で刑後に行っている間に、常任委員会選出の駒場祭委員が決まっちゃって、正式な委員にはなれませんでした。けれども、もぐりで駒場祭の仕事をやっているうちにだんだん、ぼくが駒場祭委員であることが既成事実化して、駒場祭委員会にも公然と参加したりして、第29回駒場祭を史上最大の規模で成功させることに、一つの役割を果たすことができました。さて、この間ぼくがやってきたのは、決してスポーツや駒場祭だけではありません。所謂、自治会活動というものも、他方で行なっていたのです。これは、自治委員会や代議員大会の決議に基づいた様々な活動のことです。

最初は、こういう仕事には融れたくありませんでした。時には、もろに政治からんできて、学生の中に全く関心のないことでも、みんなに訴えかけていかなければならない、そういう仕事だったからです。

しかし、全学連の大会決定や、その発行している「自治会セミナー」などを読み、学習していくうちに、自治会とはどんな組織なのかということがかわかってきました。

つまり、学生自治会とは、「全員加盟制のもとで、学生の政治信条や思想の違いを当然の前提としつつ、要求で一致し、その実現のために行動する全学生を包括する唯一の組織」であり、「学内外において、全学生の総意を代表し、特に学内においては、大学運営への学生参加の基礎単位」であるということです。

そして、自治会がなぜ政治問題を取りあげるのか、それは、学生の生活と権利を守るためであるということもわかってきました。そのために先頭に立ってたたかうのが、自治会の役員なのです。

このところがわかってから、活動の意義というものがわかってきたのです。

そついうわけで第8期も、委員長が駒場寮委員長であったため、個人的にも知っていたこともあって、常任委員になり、現在は、全学オリエンテーション委員会の事務局長をやっています。それなりに大変ですが、仕事の意義を考え、責任を放棄するわけにはいきません。今年度のオリを成功させるため、最後まで奮闘する決意を固めちゃったりしています。

3月の9・10・11日の3日間、全日本学生自治会総連合、全学連の30国定期全国大会があり、それに参加してきました。

そこで、様々な大学の経験をまき、学生の垂示こそが活動の原点であること、改めて思い知らされました。また、そのために、全学連の機関紙、「祖国と学問のために」を広範な学生に読んでもらい、全学連の正しい姿や、自治会活動の意義などについても知ってほしいと思いました。

思えばこの一年間、ぼくは、入学当時には全く予想もしなかったほど成長しました。20才近くにもなつて、自分が政治に対して、どのように関わっていくのか、ということも考えてもみなかった男が、今や、政治を革新していくことを、その青春の生きがいの一つとするようになったのですから。

色々好き勝手なことを書いてきましたが、少しでも自治会のことを理解していただければと思います。(53 LI)

火遊びのすすめ

葉月 よき子

大学ってコワイ所だ。この1年程自分がガタガタになったことは今までなかった。大学入試を機に今までの自分を捨てて生まれ変わろう、なんて思っていたが、実は捨てるようなものさえ自分にはな

ったのだ、ということも思い知らされた。「世の中なんてこんなもんよ」とクールに悟ったつもりが、実は何にもわかつていなかったのだ。と知った時の恐怖感はいいようもない。ここで素直に自分の弱かさかげんを認めればいいのに負けず嫌いがたつて何とか追いつこうとし、さらには追い越そうなどと大それたことを考えたが、友がみなわれよりえらく見ゆる目よの心境で、際限なく自分を否定してしまふ。八方塞りになってどうしたかというところ、あっさり潰れることにした。後先のことも考えずやたらと荷物を積み込むのを止めて、一旦全部放り出すことにしたのだ。これでようやく落ち着くことができた。

あれもできない、これも出来ない、という焦燥から解放されてよく考へると……ヘエ私ってこんなことも出来たのか……と思いがけない発見があったりする。すると現金なもので、じゃあこれもやってみようか、と妙な世氣も出てくる。全部放り出したくせに気がつくとおれもこれも両手にいっぱい抱え込んでいる。これでは同じことの繰り返しのようなのだが、自分では、らせん状に進歩しているんじゃないか、などと思っている(本当にそうだといいのだが……)。こうして大学の1年目は主体性の力ケラもなく振り回されて幕を閉じたわけだが、その中で考えたことが2つある。まず、今抱えている問題を解決するには自分はまだ力不足だ、ということ。だから今はひたすら実力養成に努めようなどと意気込んでいる。ひらたく言えば、いろいろな人と知りあい、いろいろな話をしたい、ということ。それには自分をも曝け出さなくてはならないので多少気恥しいのだが……。そしてもう1つは、相手に翻弄さゆつ相手をも翻弄するしたたかさが必要だということ。自分の手を考さずうまいことをやろうなんて無理な話。自分が踊らなくては相手だって踊ってくれない。それに皆が楽しそうに踊っているのをシロクンで見ているな

んで淋しくはないかな？

以上二つの教訓(?!)(?)を生かすことが出来るかどうか怪しいものだが一度買えた火遊びの味は忘れられない。多少の火傷は覚悟のう
之で大学生生活二年目、さあてどうなることやら……。(53L.I)

思ったこと少し

千明 賢治

勉強するために、通ったのではないし、また、する所でもなかつたという気がする。クラスさせないのに楽しい訳がない。だから、何か一つでも、自分の中にやっ、たと、存在の確認されるものを、残すために行っていた。今になってみると、山に登り、酒を愛し、ほんの少し、精進院施設に癡を突っ込んだに過ぎない。学内問題には、無関心を決めていたが、自分のサークル・体育会の問題では、積極的にマイクを持ち、教室を回ったことを覚えていて、

東大の駒場には、七千数百名の学生がいる。しかし、僕は何人と挨拶が交せ、一言でも話が出来たろうか。一%居るか疑問です。まして、お互いに名前でも知っている人は、またその半分居るだろうか。何故そうなのか、原因を知らない。短大のように、二年目の卒業試験に向けて忙しく、そしてやっ、と親しくなったら本郷へ行って仕舞う、駒場の体質なのか、それとも、これだけの施設があるのに利用しコミュニケーションを持つチャンスがないからでしょうか(教職員でも同じですか)。教が多過ぎるのか。

渋谷の雑踏を歩くのも、駒場のキャンパス内を歩くのも大差なく我々が近寄ることを嫌うような雰囲気を感じるのは、僕だけでしょ
うか。教管だつて、受け持ちクラスのコンパや、駒場祭企画・合宿に誘われたいのを、がっかりしているかも。先生と学生と職員で構

成して大学です。各人が各層の一部としか話さないなんて残念です。

これだけの集団だから、驚くほど性格の直派な学生から、年上の先生や職員に向つて、キザマとかテーマエラとか、とても最高学府の教育を受けているとは思えないような学生まで、さまざまです。些細な例ですが、捺印を必要とする書類があります。自分が忘れた時、印は絶対に必要ですかと来る人が居る。それが通るようだったら、最初から必要だとは書きません。また、受付時間過ぎても、脇のドアを開けて粘ります。緊急時以外、別の日に来ればよい。学生は個人ですが、我々は集団を相手にしているのです。どこかで区切らないと、限度がなく、特別扱い出来ないのです。

大学に勤めて、本当に良かったと思う事も多いのですが、良い事は直ぐ忘れ、悪いイメージばかりが残る、愚痴になつてしまひました。(学生課職員)

私と大学と現在

恒屋 淳一

獨逸の彈唱詩人よ。

獨逸の自由を歌ひたへよ。

汝の歌が我らの靈魂を支配し
かのマルセイエースの曲調で

我らを實行に奮ひ立たすために。

ロッテ一人に熱中してゐたヴェルターのごとく

詠歌するを止めよー

鐘を打ち鳴らしたものは何か、

汝はそれを汝の民衆に告げねばならない。

七首を誦れ。劍を誦れ。

やさしき笛となるなかれ
牧歌的な感傷を止めよ——
母國の喇叭となれ。

加農砲となれ、臼砲となれ。
吹け、囀れ、響け、殺せ。

曰ふに吹け、囀れ、轟け、
最後の追撃者の掛け去るまで——
ひとすぢにこの方向において歌へ。

しかし汝の詩を
出来るだけ一般的にせよ。

(番匠谷英一訳、ハイネ新詩集より)

この詩を初めてドイツ語で聞いたのは、私が大学生になったばかりの頃——もう今から二十年以上も前のこと——です。その頃の大学生生活は、アルバイトに明け暮れ、また、学生運動も盛んで——現在のようにはまだセクトナリズムでない時代——デモにもよく参加した。

日本の社会もどちらの方向へ進むか明確でない時、当時の若者が純粋に闘ったのは、学生運動を通してだけだったかも知れないと今になって考えられます。そんな状況下において、私の生き様子をなんとなく決めてしまったのが、頭初に引用したハイネの詩に出会ったからのことです。ハイネのこの詩以外にも多くの詩に出会っています。今思えば単純そのものですが、当時の私の生活や時代との関わりを思えば当然だったのかも知れません。

そして、この詩が私の精神的バックボーンとして深く心の中で渦巻いているのも否定できません。大学時代のことを語るとしたらこの詩との出会いを素通りすることは出来ない程、影響されたといっ

ていいでしょう。

他人から見れば、まったくたわいのないことでしょうか。また当時の大学生——各大学によって事情は異なりますが——は年令がまちまちで、十代、二十代、三、四十代の人もいるといった具合で、ストリートに入学した人よりも、いろいろな人生経験を経て大学に学びに来た人がいた。だから、大学の講義から受ける影響よりも、そうした同窓生とコミュニケーションすることによって、多くのものを学び合ったことが印象的でした。

最近の大学生は、ほとんど同年令、違っても二、三年程度のようですが、私の個人的な意見としては、大学というところはいろいろな年令や体験の人々が学びえるような場所が理想的です。それには学校制度の在り方、いやもっと大きく言えば社会の構造的変革が急務でしょう。そうした人々が学ぶと同じに研究者も養成できるようにシステムが望ましいと考えます。一時、話題を呼んだ「大学紛争」も、そうした、私たち人間が自由に研鑽できる、生き生きとした大学の創造にあつたのでしょうか……。

ものを創造するということは、言うはやさしいのですが、その國の文化性と関わる問題ですから、人間生涯いや人類が現存する限り問い続けながら、新しい世界の創造に前進する必要があるでしょう。そうした行為の一端でも荷之れればいいでしょうか……。

私が現在大学で勤めている理由も、右にのべたような理念のもとに在るのですが、現実の状況は、私がかつていた大学観とは、ほど遠い感があります。少しでも大学が開かれたものとして社会に存在し、社会との切実な問題を通して、単なる知識のみの研鑽所といった殻を打ち破って、あくまで真理の探求の場として機能することを目指したいものです。現在の大学が私がかつていたような機能を全く果してないとは思いませんが、まだまだ、旧き学問体系、学校制度に縛られている面が多すぎるように思われます。

極端に言えば、大学はその國の文化のパロメーターといえるでし

よう。大学制度や大学の研究体系などをみれば、その国がどれだけ文化に力を入れていくかわかるのではないでしょうが、さて、日本はどうでしょうか。私たちが問わなくてはならない問題です。

x x x x x
話を現実的なことに移しますと、私は今、東大教養学部図書館に勤め、図書館を通して私の大学理念を實現しようと考えています。が、これまた、矛盾だらけで、私が思っている学術情報センターとして機能するには、悲劇的な感じさせます。

また、図書館に関しては、利用者側にもある程度責任があるようです。例は必ずしも適当とは思いませんが、映画、音楽、演劇にしてみれば、その質的発展は観客者との相互作用にあるようです。それとまったく同じとはいえないにしても、何らかに関わり合う点は大きいようです。

教養部図書館は学習図書館の要素が強いので、利用者は学生が主体になっています。だから、主として学生の動向が私の目に入りやすいのです。私を感じるところから言えば、もう少しいろいろ要求してきてもいいのではないかと思うのです。

私たちの方にも、サービズの点で参考にした意見があれば、出来る限りそれらの意見を反映させてゆきたいと考えています。

図書館の窓から学生像を観察しますと、このところ、とみに個性的な学生が減っていくように見え、私は少々残念に思っています。

学生に限らず、若々しいエネルギーがなければ、その国の文化も老化現象をたどるでしょう。老化現象を阻止する原動力になったのは大学にいる人々の一教職員、学生のもっぱら知力にかかっているといっても過言ではありません。

大学に私が関わっているということは、右に述べた理由によるのと引用したハイネの詩にあるような純粋な社会に対する眼が私の心の深にあるからにはかたまりません。(図書館職員)

物理屋の独白

小出 昭一郎

何でもいいから書いてほしいという依頼でペンをとって考えてみる。日頃駒場の学生諸君はあまりにも教授との人間的な接触が少なすぎるのではなからうか。だとすれば、ここでまた教壇の上におけると同じような態度をとったのでは意味がないだろうと。そこで、私事にわたって恐縮だが、思い切って自分の内面をさらけ出してみることにした。ルソーほどの人なら「告白」も立派な作品となりうるが、ぼくの書いた雑文など読むに耐えないと思われる方はもつとましな本でも読んで下さった方がいい。僕とうな顔をしている教師の一人が、一体何を考えているのかと思つて読んでみて(多分感かきする読者が多いと思うけれども)今まで知らなかった何かを感じとつて下さる方が一人でもいければ、ぼくはそれで満足である。「青年よ大志を抱け」と説くかわりに愚痴めいたくり言を書くしか能のない自分に少々自己嫌悪を感じなくもないのだが、こういう場でもあまりにとりつくりつた自分を見せるのも厭わしいから、できるだけ正直に書いてみようと思う。ただしこれがぼくらの仲間の平均的な人間像だとは思わないでいただきたい。

x x x x x x x x x x x x x x x

ぼくが東大(當時はまだ東京帝国大学といつた)に入学したのは一九四七年である。以来三二年間入りっぱなしであり、このまま定年までいるとちやうど四〇年間東大に在籍することになる。滞欧の三年間を除くと、最初の三年間は本郷、あとは駒場に通い続けたわけだから、どう考えても一個所に安住しすぎたという気がする。そう思つて、ときどき自分で自分の肩をたたいてみることもあるのだ

が、それでは圧力が足りないから、ぬるま湯()からなかなか飛び出せない。研究能力は下り坂だし、後進に道を譲った方がよいのではなからうかと、良心にいささかの鈍痛を感じながら、学内行政面ではかなり酷使されているのだから無用の存在というわけでもありません。など弁解しつつ毎日通勤しているわけである。

恥かしいことだが、この三〇年間、自分はベストをつくして勉強していると思つた時期は極めて少ない。確かにそうだと云えるのは、外国にいたときくらいであろう。学生るときには病気をしたり、工業高校の先生などというアルバイトをやってそれに若い情熱を傾けたりしていったから、出席は悪いし、単位も必率にして十分なだけしかとらず、成績は甚だ芳しくなかった。

非常な幸運に恵まれて、卒業後間もなく、発足したての教養学部の手採用していただいた。漠然とそれを期待して理学部に入つたのだとはいえ、勉強で月給が貰えるなどというのは望外の幸せであつた。大学などへ行かせて貰えなかつた両親のもとで育つたために、勉強をさせてもらえろということとは非常に有難いことだと今でも思っているのだが、それだけの勉強を果たしてやっているかと自問すると、内心忸怩たるものがあるのである。この原稿も一例だが、ぼくは物を頼まれると断れない性質なので、助手の頃はやたらと家庭教師を頼まれたり、学内の雑用を背負いこんで困つた。いやなことは先にすませてから自分の好きなことをやれ、と子供の頃からしつけられていたので、雑用を思いで片づけると、あいつに頼むとすぐやってくれるということで、フギがまたくる、という更循環になる。物理の勉強は「好きなこと」という建て前になってゐるから、つい後回しになってしまう。その辺の具合、どうも難しいのである。この悩みは多かれ少なかれすべての大学人に共通してゐるのではなからうか。それを、自分は研究を使命とするエリートであるとするつきり割り切り、勉強に専念できる人は「幸福」である。だが、そういう人はエゴイストのような気がして、どうもぼくは好きになれ

ない。「心の食しき人は辛いなるかな」という山上の垂訓を、いささかの皮肉をこめて贈りたい気がする。

助教役になると、助手のときには出られなかつた教授会というものに出られるようになる。ところが出てみるとこれが恐ろしく形式的な会議で、どうも時間つぶしのような気がしてならぬ。お前はまたチンピラなんだから、学内行政のことは大先生にまかせ、こんな所に一人前の顔をしてすわっているひまがあるのなら勉強していたらどうだ、という声か聞こえてくるような気がして落ち着かない。そこで教授会は二回に一度くらい出席することにしたが、欠席しても何だか良心に咎める。例外として、組合の委員長をさせられていた半年間だけは「やるべき義務はちゃんと果たしていますぞ」という証状に、昏出席した。そしてあるとき、ベトナム戦争反対のデモをやりますから先生方もどつぞ、という発言をしたこともあり、思はずと冷汗が出る。

外国へは助手時代に一年(イギリス)、助教役時代に二年(スイス)行かせてもらった。その間は雑用は何もなから、がむしらに勉強した。滞英中の研究で帰国後学位もとれた。しかし、スイスのときには、そろそろ自分の能力の限界がわかつてきた。他のことで忙しいから、という言い訳かきかない状態で精ばいやつてもこの位のことしか出来ないのか、ということも思い知つたときには情なかつた。その頃ノーベル賞受賞式の写真が何かを見て、もつと若いときに勉強しておけばよかった、と後悔の腑を噛む思いをした記憶がある。

スイスから帰国してほどなく教授に昇任させていただいた。以来、はたして自分にその資格があるのだろうか、という不安感につきまるとわれることになった。そこに起つたのが一〇年前の大学紛争である。学問とは何かという根源的な問いかけが強く提起された。ぼくがそういうことを全く考えていなかつたわけではない。その少し前に物理学会の一部幹部がベトナム戦争中の米軍から資金を貰つて国

際会議の費用の一部にあつて、という事件があつて社会の非難を浴び、ぼくも若い会員とともに同じような問ひかけをしたばかりであつた。もっと廻れば、工業高校の教師をしていたアルバイト学生頃から心の中にくすぶつていた問題であつたとも言える。研究者として懸命に山を登つて来た頃には、そんな根源的問ひは心の隅にあつて半ば忘れられていた。一つの峠に到達してふと脚下を振り返つたときに、それが顕在化して目の前につきつけられたのである。自分のやつてゐることは何なのだろう。孔子は四〇才で惑わなくなつたさうだが、ぼくのようなほんくらには、齡不惑(四〇才)になつてから本格的に惑ひだすことになつたわけで、未だに確たる解を求めにいたつていないのだから全く情ない。

一月一七日の朝日新聞によると、「あなたにとつて十年前の東大闘争の意味は何ですか」と問われた文学部長は「全く無駄な時間の空費であつたと思います。ああいうことかなければ、学者としての業績ももっと進んでいただんではないかと思つています。……」と答えてゐるといふ。もしこの通りなら、この先生は何と幸せなんだろう、とぼくは思う。自分は學問研究を天命とするエリートである、とこのように割り切れたら惑ひもないのであろうか。そういう「哲学」を學んでおかなかつたことを後悔すると同時に、二ついう発言(それを本當なら)を憎く思う心をぼくは抑止できない。アインシュタイン級の大学者ならそれも許されていいのではないが、などと思つてみる。しかし、アインシュタインはあんなに世界の平和を訴へ続けた良心的な科学者だつたではないか。

とにかくぼくには二ついう自信に満ちた発言はできそうにない。紛争によつてぼくの研究生活は文学部長以上に痛めつけられた、といつていいと思う。哲學者ならあの紛争から沢山のテーマを拾ひ得たはずだが、物理屋にとつては研究は妨害されるだけだつたのだし、おまけにぼくは最悪のときに学生委員(第六委員)やら評議員やらを合計三年にわたつてやらされたのだからたまつたものではない。だ

かぼくは、自分の人生にとつてあれが単なる時間の空費であつたとは思つていない。人間は考へる輩であることが尊いのだとすれば、あれほど多くのことを考へさせてくれた体験は戦争以外にはないからである。あの憤怒鳴り合つたヘルメット着用の人達か今では懐しくさと思へてくるのだから不思議である。

ともあれ、三年たつて研究室に戻つたときぼくの頭は「田園まさに荒れんとす」という状態であつた。二十代三十代でなければいい仕事はできないと言われた厳しい専門分野である。駭駭も老いれば驚馬に如かずと言ふが、駭駭ならざる身にとつて、表之のきた記憶力を嘆きつつ老眼鏡を通して式のたくさん並んだ論文などを読むのはつらいことである。怠け心が起きると、そこにつけこむかの如く、こういう學問は何のためにあるのか、というあの「根源的」な問ひかけがどこからか聞こえてくる。自分のようなボンクラは研究者としてろくなこともできないのだから、後進のためにセミを沢山開講したり、わかりやすい本を書いたりしてゐる方が、世のためになるんだ、と悟りければ、孔子のように五十にして天命を知つたということになるのかもしれない。しかしやはり研究の魅力は捨て難いものである。一日ずつと没頭して、ああ今日は充実した時間を送つたと感じるのは、物理の勉強をしたときだけなのである。そこで考へてみると、若いときの勉強には、博士になつた後とか教授になつた後とか、欲望が全く無縁ではありえないことに気づく。今こそ、そういうことなしに本當に純粹に勉強が好きなのかどうかためめされてゐるのだ。ここで怠けたら、かつての勉強は名譽怒によるものであつたということになつてしまふではないか。

といつわけで、この原稿もこの辺で切り上げて、勉強にとりかからせてもらうことにしたいと思ふ。しかしその前に、ここにある試験の答案の採点をすませなくてはならぬ。全く、青年老いやすく學成り難し、とはよく言つたものだと思ふ。年をとるといふことは不可逆だ。この駄文を読まれた方々にとつて、ぼくがよき反面教師となりうれば幸いである。(教養學部教授、物理學)



随想 — 苦い体験



この話は、人によつては、まづたくつまらないと考へるかも知れないが、当人としては、まことに後味の悪い出来事なのである。これはある日、池袋から赤羽線に乗つた時のことである。その時電車は、券分混んでおり、乗り換えた私は、奥に入つて立つて立っていた。すると、私の前には、女子高生(中學生かもしれない)がすわつており、その隣りには、若い二十歳位の男がすわつていた。この男は、体格はがっしりしており、上はセーター、下は白のトレンチンという身なりで、悪くいえば、運動しかできさうにならないような感じであつた。はじめ、チラ、と見た時、甘さうな顔で、なかなかいい男だな、と思つたが、どこか、いやらしい癖のあるような顔つきだつた。電車が発車し、何ということもなく、終点の赤羽に近づいたふと下を見ると、何と!この男の手が、私の前の女子高生の胸のあたりにまわつていたので、(さういへば、その少し前、この男と私の目が会つたのだが、これは、この行為のためだ、たらしい。——すると、私はなめられたのだ!)私は何か言つてやろうかと思つたがこの女子高生と男が知り合ひである可能性もあるから、せし控えてチラチラと見ていた。すると、この女子高生は、いやな様で、持つていた手提げをこの男との間にはさんで、男の手をおさえようとした。しかし、男は、手を引、込めなかつた。女子高生は、男に向かつて小声で何か言つた。(これかもう少し大きい声で、「イヤ」とか、「ヤメテクダサイ」とでも、私に聞かせる位であつたら、私は助けてあげられたのに……)私は、まだは、きりと状況がわからず、静観した。何か言われた男は、逆に、女に、にこやかに話しかけ、二言三言会話をかわした。(この男が痴漢だとしたら、何とどうぶてぶてしさをあつつかう)そして電車は、終点赤羽についた。

私は、この男が女子高生にへんな氣を起こしていると察し、降りる際に邪魔を(密かに)してやろうと思ひ、女子高生が立つて、出ようとした所へ私がうしろに入り、男と別々にしてやつた。案の定、女子高生は急ぎ足で階段へ向かつた。しかし私のうしろの男も、大したもので、私をさ、とよけて、すぐさま追ひかけていつた。(私は男を引きとめるべきであつた!)あいにく、私は大きい荷物を持つており、その男を避ひかけることはできなかつた。私は少々あきらめながらも、もし、乗り換への所で、また会つたら、是非とも助けてやろうと思つていた。しかし、会うことはなかつた。

ああ……この後味の悪い、何故、助けてやれなかつたのが、最初の時に何か言つてやる勇氣はなかつたのか?男が強さうだつたから言えなかつたのか。いや、いざとなれば、言つてやるつもりだつた。しかし、何しろ状況は、きりわからなかつた。——言い訳ではない、實際体験すればわかる。——慥しむらくは、この女子高生が何かもつと強い態度に出たなかつたのか、席を憤然として立てば、私が出てやつたのに、(しかし、これは後で考えてみると、私が前に立つて、荷物をかたわらにおいたことにより、出口をふさぎ、また、男にとつてもいい桶がわりになつていたのでないだらうか。何とも、はがゆく、くやしいことだ。)二つという時には、やや引、込み思案の私としては、迷つてしまつて何もできなかつた。世の女性諸君に告ぐも、とは、きりした態度をとつてくれ、さうしなれば女性の味方は、手も足も出せないのだ。

そも何故二つ気がくさつているのであらうか。それは、私がそれほど信頼に足らぬとみなされているとゆかつたからである。私に、助けてくれと、そぶりさえ見せてくれない。そのことが私には、たまらなく残念でくやしいのだ。それゆゑこんなにくさつていのだ。

—— 後悔先に立たず ——

() 投稿

編集部座談会

今...

自らを見つめ直すとき

毎日昼休みになると、三叉路はトラメガの不協和音でいっぱいになる。恒河沙才2号では、こういう元気な人達を普段何もいわない人達がどう思っているのか特集した。読者もさまざまな感想や意見を持たれたことと思う。今回、編集部ではこの特集をふまえて、いくつかの点について話してみた。

A	53LII	男
B	53LI	男
C	53LI	女
D	53LII	男

A じゃ、座談会を始めます。まず恒河沙才2号の「元気な人達への手紙」の中で何か感じるところがあったらうってみて。

D 内藤君の記事についてだけと……あの文の中で本で得た知識と体験という二つの事が対比されてるよね。あの文にも書いてあったように、本から得た知識というのは、ほんとに徹々たるもので、しかもPowerを持ってない知識だと思うんだよね。で、体験とか経験とかを通じて得た知識、広い意味での知識っていうのは何かを創造するPowerを秘めていると思うんだけど。

A そうだよ。今の駒場ってのは、自分から何かを体験して自分の血や肉となるような、広い意味での知識を得るといふよりも、むしろそういう体験なんかを極力避けようとして本とかそういういいわゆる狭い意味の知識に没頭してる人が多いし、サークル活動とか学生運動とかそういうものはすくなく沈滞してる。

C 体験っていうことの大部分を占めるのは人間関係じゃない？別にそれは秩序だったものでなくて、動いているうちにイヤでも関わってくる。そういう人間関係をさすんだけれど……イヤでも関わってくるからおもしろい反面、シビアなんだけとね。自分が叩かれたり、相手を叩いたり……

B でもさ、人間と人間の関係っていうのは結局観念の世界だけだし。

A そんなことはない。人間の関係っていうのは観念とは正反対のものだと思うよ。

B だけど、人間と人間とかお話しだけしてても何ら成長がないと思う。

C だけど、お話しだけするんじゃないもん。

D あのー、人間と人間がふれあうときっていうのは観念の世界じゃないと思う。だけどBのいうこともわかるわけ。何かふれあって生まれたものを、また観念の世界でとらえかえすことも必要だと思うんだけど。それをやると、ふれあいで何を感じた、それだ

けて終わっちゃうのじゃないのかな。

A でもそれは感受性の問題かもしれないけど、鋭く感じとってハッとすることもあるだよ。

B いや、それがないといってるんじゃないくて、人間と人間だけじゃなくて、我々をとりまく自然とか物質的な世界というものもあるわけでしょ。結局、現実において問題が起ってくるのは、そっちとの関係だと思っただよ。

D 現実において問題がおこってくるのは確かにそこだと思っただけど……

B それね、人間かやっただ結果である何らかの現象があって、それと自分自身が対峙したときにはじめてそう認識できるんだと思う。それは人間と人間の関係とはいえないでしょ。

A うん、そういう意味で言おうとしてるんじゃない。

B おれは、ただ体験にはそういう体験をいれないと、「何か体験すれば、経験すれば」という風にはいえないと思うということ。もちろん人間と人間がぶつかりあって価値観がぶつかりあうということとは、自分自身の内面性みたいなものを認識していくためには必要な過程だけれども、ただそれだけで、例之は、いっしょうけんめい考えて哲學だけやっていけばいいかっていうと、そうはいかないだろうということ。

A もちろんそんなことはいたいわけじゃないよ。だから矛盾してさるわけじゃないんだよ。

B そう、内容が違っただけより、足りないっていいたいわけ。

□ キッカケ

A 体験することで、Bがいったように自然と対峙した時に何か大きなものを得られるということがあると。また、それと別で、もっと単純な話だけれど、人間とのふれあいという点で「観念化する

とかさういったレベルでなくて「感じとる」という点でものすごく得るものがあるんだよね。そういう体験をする。っていうのは、そういう意味でいいことなんだけれど、今駒場だけを見てみてもなかなかさういうことがない。これはどうしてなんだろう。みんな持ってると思っただよ、何かやりたいて事は。だけど実際やれない……

B もってる内容、っていうのを問題にしたいと思わない？

C でも具体的には何にも持っていないと思う。

A だから、具体的には持っていない……

B 要するにさういうのは持つべきだという観念だけを持ってて実際に持ってるっていうのは違うんだよ。

A じゃ、その内容はともかくとして、どうして持てないのか、持てないのか、或いは持ってたとしてもやれないのか、それどうしてなんだろうね。

B まず、意識っていうのは、さういうの持て当然、常識として持てるというだけで、さういうのは持てるべきものであって、内容までは考えないと、結局、全く持てないのと同じという形でしか持てないと俺は思う。

A だから、その、持てるものの内容はいいけれど、どうしていまある状況になつてさるのかわからないことね……やっぱりキッカケがないっていうことがな。

D キッカケっていうこともすごく大きいと思う。だけど、キッカケに対する反応の仕方っていうのは一人一人違うわけ、それが実際、何かのキッカケになる人もいるし、ならない人もいる。で、現在、実際、キッカケになるものはいないと思う。でもたまにそのキッカケに出会ったとしても、それを自分のキッカケにできない人が増えていくというのも事実だと思っただよ。

C 自分のこととして感じられないっていうのかな。何ごともひとごとのように感じられちゃうっていうのがあると思うのよ。本当に自分の問題だ、っていう風に思えないのよね。いつも誰かがやっ

ちゃうだろう、放つとしても何とかなるだろうっていう感じで、すごく自分から離れた感じがしちゃうわけ。

A 実際何とかなるしね……マア、問題の性質にもよるんだろけど。

D っていうより、何とかあったと思えるんだよ。

B 要するに問題なんかまるでないんだと思えればさ、問題のこ
となんかまるで考えないでも生きていけるからさ。

D ……平和にね……だけど、そういう状況でも対応せざるを得ないだけの力をもったキツカケっていうのがあれば、それに反応する
と思うわけ。

B いや、キツカケがあつてその内容に反応するってことが重要
じゃないやなくてさ、何らかのキツカケでものを考え始めて、そう
いう意識さえあればあとはどんなことにも対応していける、それ
を自分自身でつかまえられるようになるってことだと思ふんだよね。
だから、最初のキツカケっていうのは、まったく関係ないことでも
どんなことでもいいんだよ。

A 体験して大きくなったり、又と関わりあつていくことかいい
んだということが頭でわかっているけれども、これこれこういうこ
とをやればこれが得られますとわかつてやる人はいないわけ
で、何か自分から置んだキツカケとかそういうんじゃないやなくて、そう
せざるを得なくなつたからしょうがないからやつたら、さうだつた
みたいよ。

B とところが実際にみんなにきいてみると、こういう問題がある
んだよと真事に教えてくれてさ、こういう風にすればいいんだよと
さも解決できさうなこといって、で、なぜか問題はいつまでたつて
も解決しないで黙然とそこにあるんだよね。

A 一番いい例が、自治会なんかはそれで導いてるっていう感じ
しない？ 自治会っていうのは非常に懇切にいねいに問題の所在と
原因と解決方法を説明して下さるわけだよ。だから、ヒラとかいっ

てることかをちゃんと聞いてれば、まったくなるほどなっていう
ことにひまわけだ。もちろん内容に問題がないとはいえないけれど、
だけど彼らが一生懸命ああいう風にいつても、何もかわらないわけ
だからそれは決まっていわれてハイハイといつて、じゃあやりましょ
うっていうもんじゃないと思ふんだよ。

B やっぱり最近とみに言われる受験の影響が大きいと思ふんだ
よね。わくを与えられて、その中のことだけをやればいいんで、そ
れ以外のことをやっても何も評価してもらえなくてね。わくの
中
のことが一つでもできないと、それだけバカなんだよ、ということ
になつてね。そのうち、わくの中だけ一生懸命やる人が非常に偉い
人ということになつてね。

C それに、数学みたいに君の能力はこれだけですよ、といわれ
たら終りでしょ。

B 定量化できるもの以外対象にしないでしょ、ああいうので
定量化できるっていうことは結果がわかりきつてることしかやらな
いってことさ、出発点と結果がわかつていてその間さをつなけれ
ばよいつていうことですよ。

迷路をとければいいんでさ、出口があるかどうかわからない迷路
を進む能力というのは全く必要がないんだよね。でも現実において
は、先というのは全くみえないんであつて、その中でも今ある条件
だけから何らかの方向性を決定していかなければならぬんでしょ。
結果から逆算して次はこういう風にしなればならぬ、っていう判
断はできないわけだね。

□ 規成のレール・減点法

A 今でたことだけど、結局何かをやつても客観的に評価されな
いし、要するに損なわけなんだよね。しかも、何かやるとなると
今の状況だと、例之ばね、トラメカで声高に叫ぶとなるとますます

す何かやるのはよくないことだ、恐い人達がやってくるんですという
ことになっちゃうし。

B 暴力に対する反対キャンペーンてのはすごいもんね。もちろ
ん暴力がいつていうわけじゃないけど、権力機構とか現在の国家
だって結局暴力統治がなければやっていけないわけで、それなのに
あらゆる暴力に反対できるとか暴力だからいけないとかいう形とい
うことはできないんだよね。しかも政治的な意識をもつことイコー
ル悪だというような意識ってのはすくく広まってると思うんだよ。
で、現実っていうのはすべてが政治化されていくのが現在の複雑化
された社会ではやむをえないことで、どんなことでもみんなの参加
で決定しなくちゃいけないことは、結局全てを政治化していく
ことになるわけでしょ。でも政治はいけないんだといってさ、で、
民主主義とかいってさ……結局内容のない言葉の羅列だけしかでき
ないような感じになってきているんじゃないのかな。

D そう、そうだったことしかいなくなってきたりして、迷路
にたどると、現在ってのは、迷路に既成のレールがひかれていて
その上を走ればよいといった感じなんだよね。で、レール以外のと
ころを走ろうとして、仮に出口にたどりついてても、それは評価され
ないし、途中で行き止まりにぶつかると、レールの上を走っている
人のいいもの笑いの種になっちゃうんだよね。

B 滅点法の世界か。

C 何か大量生産されていくみたいね。

B いかにも現状を守っていくかが大切だね、少しでもいいことを
やろうと思つて、うまくいくといいんだけど、うまくいかないとダ
メ、何の価値もないってことになるんだよね。

A 結局、その線路からはずれたことは、全くの趣味の領域にお
しやられちゃって、本当は線路の上を正しく歩きましようというこ
とで……

B で、その線路が破滅につながる道じゃないかとか、正しくな

い道じゃないかとか疑いをもつことは全く許されない。そういう疑い
いを持つのは政治的な悪い人間ってことになってさ。

C 趣味的にっていうこと当たってると思う。みんな二重生活し
てるみたいな所あると思うしね。タテマエとしては、「ハイそうです
か、みんなが行くからまあいいや」って行ってしまつて、自分の思
つてることは「まあ趣味だけど大事大事」ってなつてしまつて……

B 完全に個人主義化が進んでいるから、結局独善的でーその内
容がどうかというのは別にしてーただ一っだけの考えにこりかたま
つて他の考えはとりいれなれなれといった意識になつて。そうすると民
主主義が生れてきた最初の、みんなの力でつていう力が分散化されて
何の力も生み出されなれなれという状況になつてしまつてるね。たか
ら、自分の日常に埋没してしまふんじゃないかとどうしようもない
んでね。

それと、定形化されて外から注ぎこまれた知識だけで——2号の
特集の中で、批判するのにも定形化されて、外から与えられた言
葉でしかしゃべつてないと思うんだけど……言葉ってのは文化だか
ら自分の言葉を持ってないっていうことは人間性そのものが侵略され
ているっていうことになると思うんだよ。

□ 一步ふみだす

A で、結局、そういう状況だけれども、それが決してオメテ
ウゴザイマス、万々歳というふうにはいかないわけで、みんながバ
ラバラになつて、既成のレールの上を走つて、それでその他の所は
趣味ということでは片付けてね、ハイ、オメテウつていうことにな
つて本当にオメテタイ自ら問題はなないんだけどさ、ちつともオメテ
タくないわけで。

B そうなんだよね。ところがそのオメテタくないってことは見
えないわけだね。一歩どんな方向でもいいからさ、まさに趣味の領

域でもいいからさ。それを一考ふみ出さないとみえないわけ。それをふみ出すキツカケというものは結局人とのふれあいからしかでてこないと思うんだ。もちろん、自分か何らかのものをみて大きな衝撃を受けるというのでもいいけれど、我々の生活っていうのは自然から遠ざかっているから——せいせい交通事故にあう位しか不慮の事象というのには仲々発生しないからね。あまり強いキツカケみたいのはでてこないと思うんだよね。

A それと、一ついいたいのは、さっきもちょっとだけけど、既成のルール以外を考ぐということ、ある意味で叩かれる訳でしょ。それだけでもどういふことも必要というか、ルールの上だけを走ることだけがいいわけじゃない。そこで多分叩かれてもってという一つのよりどころみたいになるのは、自分かそういう既成のルール以外のところを考いでいくことによつていろんなこと体験して、人とのふれあいの中で何かを得たり知識を生きたものにすぎずで、一度味をしめろってことがあると思うんだよね。本当に味をしめて、一回やってみると本当にすばらしいなつていふのが人にもよるだろうけれども大なり小なり得られると思うわけ。

B 要するにキツカケの重要性ってことなんだよね。

A いや、キツカケの重要性っていうよりも……さっき評価されないといつたでしょ。むしろ叩かれるわけだ。だけど自分が本当にすばらしいなつていふふうに見えるね、またやっついていこうという気にもなるしや。

B だから、それは同じことをいってるんで、今、我々の生活っていうのは完全に規格化されて、カリキュラムを与えられて、それをその通りやっついていく毎日だと思うんだ。もちろん自分ではどういふこと意識しなくても、結果的にはどういふ形で与えられた役割をこなしていくという形でしか進んでないと思うんだよね。その中で何らかのキツカケで自分が今までのことじゃなくて自分自身の力になんらかのことをやっついてみてね、自分でものを考えて、その結果ち

やんとした成果をあげることでできるんだという意識さえもてれば今度は次の問題へも積極的にとりくんでいけると思うわけ。でも、そのためには、最初自分の足で突然ふみ出すというわけにはいかないんでさ。何かのキツカケというものが重要だと思うわけ。たとえばそれはサークルだとか、人とのつきあいたとか、駒場祭で踊るとか、そういうものの中から生まれ出てくるんだらうけれども、今サークル自体も、サークル活動は悪いことなんだよ。っていう感じで……

A 悪いことか、或いは全くの趣味かね。

B そう。そういう感じでね。だからただみんなを遊んでね、クタクとしておだやかかくに日々を送ればいいんだというふうな形でしか存続できないか、さもなければ、なんか棒を持ってね、オウソをかぶってどこかへ行こうと、そういうのじゃちょっと入っていけないしね。そういう風な形でしか存在できないというのは現在の社会を端的にあらわしているのかもしれないけど。問題に気づいたときに今度は不安になるわけだよね。確かに問題はあるけど、あまりにも問題は大きいという形で、それでそういうセクトなんてのはみんなが入って何らかの安心感を求めてるようなところもあまと思わうわけ。そういうふうな認識はあまりでてこなかったけど、この特集の中では。

A 実際その中で安心感求めてる人が書いたわけじゃないからね。

B ただ、その反対の面はでてると思うんだよね。結局、問題にぶつかったときには人間に立ち戻って、一体人間の存在とは何なのかっていうことを認識して自らの「being」をみたいなものをつかめなければ、出撃基地っていうか、そういうものができないうんだよね。問題を打つ目、っていうのかな。でもそういう意識ってのはこの特集に出てると思うんだよね。例えは「僕は人間自身についてもっと考えたい」という言葉が結構でてきたと思うんだ。そういう意識ってものをもちと育てるということが重要じゃないのかな。

さっき言った「Ideas」だけでも自分自身が目を見て、これだけ

は絶対間違いないのな仕事なんだと、誰からどういふふうには叩かれて批判されてもね、そこを足がかりにしてまた自分の考え方をたてなおせるといったようなもの、これは体験からしか出てこないと思うんだよね。何でも外に出てみてまわるということが、今、一番重要な事じゃないかなと思うんだ。

C でも、そういつた点で臆病だと思う。

B だから、本を読んで政治的の活動に走って、マルクス主義云々とかいっていいけど、それはあくまで形式的なものだと思うんだ。

C 今までそんなにひどく叩かれたことがないのに叩かれる可能性もでてくるっていうの、やっぱり悪いから。

A それは絶対あると思う。

B 悪いんだよね。でも一度スウズしくなれば後は同じっていう感じでね。(笑)

A 同感。

□ 通過点意識

A じゃ、最初に戻るけど、何かをやればいいというのはいまはたぐさうなんだけど、今、駒場をみるとどうだろうということになるね。

B 要するに、みんな何も考えてないよ。例えば自治会運動なんか、ごく一部の興味を持った方々が一生懸命やって下さってる、という感じでね。

D だけど、そういう興味っていうのは自治会活動なんかやってない人の中にもあると思うんだ。

B 当然、「救世だ」って一定の問題意識をもっていろいろ反意はすぐ出てくると思う。でも敢えていいたいのは、ちょっとシビアかもしれないけど、その程度の意識っていうのは持っている内に入ら

ないと思うんだよ。その程度のことってのは、一定の頭があれば本を一冊くらいよめばわかるわけで、問題をしつて、っていうのと、自分がそれを問題だと感じていて、っていうのは全然別問題じゃないかな。

A いや、だけれどもみんなが何かを持っていて、っていうときの、その内容っていうのは、決して一冊の本を讀んで、っていうんじゃなくて……五月病とかそういうものがあるよね。でね、実学大学には入ったもののほんとうに何をやっていいのかわからない、はまり「わかない」っていう言葉じゃなくても、酒や麻雀、或いは受験勉強みたいな学校のお勉強を一生懸命やったりして暇はつぶすけれども本當に充実している、っていう感じがしないわけ。そのところは、持つてくるうちに入らない、とかそういうものじゃないと思う。

B でも、それは自己の存立基盤を失なうっていうことであってね、自己が自己以外の世界を何らかの形でとらえていて、ということにはならないと思う。それで、そこまでいかなないと足りないと思う。

D 足りないかわからないけれど、それなりに本當に何かやりたいという気持ちを持つてると思うんだよ。でも、何もやらなかったよ。で、どうしてやらなかったかというと、そういう人たちは、将来、大学を出たら、ということまで射程を長く置いてからだと思ふ。

要するに大学をただの通過点とみているんだよね。だけど、言いたいの、もし今自分の存在している場、大学を通過点としてとらえるとする、いつまでも、大学を卒業しても、通過点しかあらわれないうち、通過点としてじゃなく、自己の存立する場ということとみつめて、そこで何かをやるうとしなければね。通過点、通過点と思つて、うちに「ア、死んじやった」ということになると思う。

B イヤ、私は天国へ行つて頑張るんだ、と。いって。(笑)

A うん、そもそも受験というところで高校は完全に通過点化しているし、大学に入ると就職ってものを考えて、多少足しになる様(い)成績でもとりましよう、という感じで……

C 就職してもまた出世ということだね。

B まず大学に入ればあとは何とかなるだろうから今は与えられたことを一生懸命やろうと高校時代は思ってた。いざ大学に入ると会社に入らなくて自立すれば何でもやりたいようにできるじゃないか、それまでは与えられたことをやっていけばいい、で会社に入ると、課長になるまでは、部長になるまではということになってね。

C とかいつてさうちに「ハイ、老人」

B で、気がつくと定年。

D いつまでたつても通過点。

B 残るものとりつたら、例えは、さういつた意識で会社に入つて会社かもうかつたとか、出身校の評価があつたとか。

A 自分自身の中に充実感みたいなものが残らないんだよね。

B それは自らの考えとは別の所で、社会に対する影響と他の人の為によつたというものは残さないんじゃないかという気がするんだね。

A 他の人の為にするのも、流されてもかいていたら結果としてさうなつた、というんじゃない、自分がさういうふうを意識してやつて充実感みたいなものが残らないんだよね、さうじゃないことが多いから問題なんだ……

B で、偉い人は、それで満足できるようならばいいんだって(いう訳だね。

A でもそれは社会に出してしまうと、仕事自体の忙しさの日常性の中に埋没してしまうことで結構可能になるね。

B それと趣味の領域を分離して満足感をそこにみいだすことによつてもね。

C 仕事だけで精一杯になつてね。

D 結局、問題になるのは、自分がない、つてことだよな。

B そうなんだよ、自分を知ることが必要なんだ。でも、自分を知つていうことは結局人間を知ることだよな。

C 自分だけをみてたつて何にもならない、他人の中に映つて自分のをみなければ。

A 自分の世界観・価値観を把握するには他の世界観・価値観とぶつからないとダメなんだ。

D 他の価値観とぶつからないと自らの価値観はドンドン凝縮していつて、パツとみたら「あれ、小さくなつてさよ(苦笑)

A ピンホールくらいになつてね。そのうち視力も衰えてきて、それもみえなくなつて、気がついたら櫛櫛に片足つ、こんでさつて二とになる。

□ いろいろやつて、創造を……

B 自分の内容を何とか豊かにしなければいけないんだよね。それは口でいうほど簡単じゃなくつてね、いつまでもそのままなんだよね。

でも、まあ、他からの刺激をつかまえて逆に今度は外の世界に向けて、何らかの働きかけを行なつていかないと人間とはいえないで、でも現実にはさういつたことか何もできない状況があるわけさういつた状況つてのは人々が支えているわけで、少しずつでも人々の意識をかえていかなないと永遠に状況は変わらないと思つんだよ。

A だから、さつきもいつたけれど自治会なんかか問題の所在を懇切にいねいに教えてくれて、これこれこういう問題がありますよ、みなさん考えましようといつたつてダメなんだ、それよりもみんなが持っているもの一足りないかもしれないけど、一つ一つ確認していきたいと思つわけ。

さういつた意味で2号の特集なんかにはさういつた意識かできていたんじゃない?

C ハッキリとした意識つていうんじゃない、手かかつていうことじゃないかな。

B どういう意識を持ってるか、っていうのは、わりとクリアにできて、それを読んでみんな同じように考えてるなと思ってそれでオシマイっていうんでもまあいいし、できるだけ生の声をひろってあちこちにぶつけていきたいと思うね。何らかのインパクトを与えて……

C それに、こういうのに載っているのを見て、自分も書きたいな、投稿したいなとかみんな思っただけいいわね。

B 現実には密接してやっけていきたいね。

D 今、Bが言ったことだけど、現実には密接してやっけていなくても、Bが言ったことだけ、現実とか離れたことのようにみえるんだよね。

A そう、何やっけてみたろう、あの人たち、って感じになっただけ。

B 現実ってのは常にもやががかってるものでね、そのもやの先をみとおさないといけない。

A 結局、オワンかぶってる人や自治会の人なんかと同じように現実には密接してやっけていきたいと思っただろうけれども、オレはオレ達のやり方の方がまだマシじゃないか……

B まくら、そのへんもちょっと思うけどね、実をいうと、(笑)

A へへへ、ついwahahaが……。ただ声高にアジるというの、それだけでいい時代もあったかもしれないけど、今はそうじゃないと思うね。

D 俺たちがまだマシといえるのはね、自治会やセクトなんかは、多くの学生をつかむことで実際失敗して、で、まだこっちは失敗するかどうかかわかんない……(笑)

A 結局売り上げにこだわってたりして。

B そういう意味では、今まで、恒河沙はダメだね。でも仮に文学部の問題なんかでも、自治会よりはまだ訴えかける力をもっているということだからね。だって人を集められないでしょ、自治会が

何言っても、代議界大会なんか全然成立しないしさ。で、文学部学生大会っていうのができて結構参加したわけで、駒場にいると悪いという宣伝しかされてないのにな、動きの目というのは集った人はみんなもっていたわけで、みんなが考えてないわけではないし考えられない訳でもないんだね。ただ何かのキッカケが必要でそれがないと人間というのには動きださないとするのは自分の経験からもいえる。だから恐れずにはんと身近なところでもいいから、自分のやりたいことをちよつと勇気を出してやっけてみることから世界のみの方が変わってくるんじゃないかと思うんだよ。

D ほんと、ちよつとでいいんだよね。最初はちよつとでもいいから既成の世界から足を出せればね。結果的にはドンドンふみこむことになるかもしれないね。

B でも、いくら一生懸命やっただころで、人間なんて最終的にはどうせ少しのことしかできないんだね。

A かなり自分ではやっけたつもりでも、実は大したことやっけてないんだよ。

B だから、できただけのことではやっけていけばいいんじゃないかな。やっぱり創造っていうことは人間には重要なんだからね。何かを作っけていかなくちゃ、それは別にさ、社会体制がどうのこうのとかいう偉そうなことじゃなくてもね、絵を書くでもいいしね、何でもいから、ただ習ったことをやるんじゃないでね、自分で新しい考えでやっけていけばいいと思うんだよね。

D ほんと、すべてにわたって今、創造っていうものがなけていくものね。

B やっぱり、この我々の雑誌だって自らの文化というものを問いつめていく所から出発しなくちゃならないね。

D 文化っていうのはずごく大きいものなんだよね。

B そう、でもそれが、今、ドンドン小さくなっていると思うんだよね。ただ広いだけでパラパラの物じゃ困るんだよね。

D 今、文化っていうのが取捨選択されて—これは文化の中では
いらぬものっていう感じでねードンドン切りすてられてうすくな
っているような気がするね。

A だから、さっきBがいったことだけど、ちよっとふみだして
みる、そのためには、自分の今ある場をただの通過点にしないで…
だってもったいないじゃないか、一回しかない人生を通過点にしち
やったら本当もったいないと思っただよ。

B そういった意識ってのはなかなか生まれにくいと思うな。
もったいないっていう意識が生まれれば別に問題はないわけで。

A やっぱり一度味をしめないと……(笑)

B 自らの場というものを自分が今どこにいて、どういうことを
やっているのかということを見つめて、その中から何でもいい自分
のやりたいことをやっていこうという意識さまでてくれれば……でて
きてほしい。もちろん、みんなそんなものは持ってるんだよってど
うせいわれると思うんだけどね。ただ持ってると思うだけでは持っ
てることにならないからね。で、まあ特に何もやることがないって
いうんだったらね、まあ簡単な仕事だから恒河沙を作るのを手伝っ
とかね、そういうのでいいわけで……(笑)

A で、みなさん時代錯誤社へ入って下さい、と。

B 最後は宣伝と。

A 爆笑で終りと。

では、そろそろ紙数がかさんで恒河沙の定価をこえるといけな
いので終りにします。

恒河沙文

原稿募集

恒河沙編集部では、読者の皆さんの投稿を期待しています。編集方針に
対しての御意見、記事についての感想や批判、随想、文芸評論、創作など、何でも
結構です。皆さんのアクションをぶつけて下さい。

原稿は、原稿用紙をお願いします。枚数は自由です。

宛 東京都豊島区巢鴨1-1-3 〒170

小山方 時代錯誤社

編集部員も募集！ いっしょに恒河沙を
つくってみませんか。

独所感総文

★ 亜井植夫様

暴力が入ってなせ悪いのですか？(暴力は自分の主張を実現する効果的な手段だと思います。むしろ、その根底には、消極的であれ積極的であれ多くの人々の賛同を必要とするワケですが、その賛同する要求を実現するのに、うまくつかえば「力」は非常に効果的だし、あるいは唯一の手段のこともあると思います。

P.S. 最後にワケがわかったようでワケランようで、よく考えてみたらやっぱりワケランような文章で終えるなんて、なかなかカッコイイよね。

★ 運流様

「自分の価値観とちがうからイヤ」といつてるようにしかとれませんでした。

★ 機知様

サンセー。極端なコトやって学生を難反させるってのはマヌイよね。一歩だけ先んじていることコン必唾なのだが……

★ 内藤達世様

二もつとも、何もいうことはアリマセンです。

★ 長島敦子様

1. 毎日かたのしければそれでいい、いいんじゃないですか。それこそが前進の原動力だと信じているらしいですから、²学生運動を参加する者の意識の側面からはかり考えないで、その意義の点からみても悪くはないんじゃないですか。一応は我々の生

山樹 浩一

活の改善をめぐっているような気がしますから。

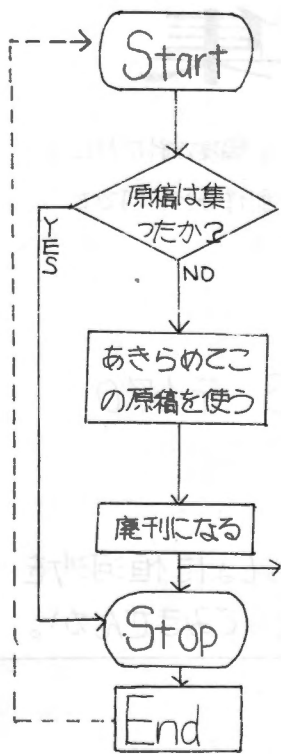
3. 母協なんてのは共同体をうまく運営する為には必要不可欠のものだからそう卑下することはないと思えます。母協パンサイ！「母協のない生活を送りたい」などとウソブクやオ男にあまり感化されな

4. 他人を突きこまなくちゃ何もできないのだから、そう言われても困るんじゃないですか。余暇なんてできるもんじゃなくて作るもの

なんてことは、若い全女性の味方の筆者としてはとても書けません。(53 LI)

注 筆者から編集部に左の図が同封されてきましたので忠実に再現したいと思います。(編集部)

俺は知らんぞ!!



もっと「元氣」になろうよ

うのはるか

「元氣な人たちへの手紙」を読んだ。もっともなことだと思ふ。——たしかに、ハルメットがひびいて整列して「踏台昇降」や、てんのなんぞ耐えられない。だけど、へ元氣な人イコール政治運動する人イコール過激派、この図式が私はコワイ。ぬえい、たい、一般學生イコールノンポリ、これだいいのかなあ？「元氣な人たちへの手紙」なんて懸つけること自体ヘンだと思ふんだけどなあ。私は、

今、いわゆる「一般」學生、てのは政治とか自治とかにうサンケサげな目を向けるのがぶつうだ。いや、私だ、てかなりその傾向がある。なんか、政治、てやつが「み」ともなく「見えるのだ」。(たとえばシュプレヒコール、あんなのハズカシイしぬ、やるの。)それで授業にも適当に出て適当に差込んで適当に卒業してくわけ。そして、自今、ノンポリであることを誇りとし、イデオロギイ性が無いことを誇りとするわけ。

でもハタとふりかえ、てみると、それこそ体制(こういう、使い古されて死んだコトバは使いたくないけど、でもや、は体制、てやつはあると思ふ)にみごとに巻きこまれてる、てことじやないのかな。管理体制、てのは、さうらぬ神にタタリなしなんだと思ふ。反撥せえしなけりも何や、た、て、自由、なわけ、ほとんど、たとえは戦前の治安維持法、あれだ、て、「一般」民衆にはあ、た、て、てなく、た、て、一向に平気だよ。政治にかかぬらぬ限り「幸福」はたのめしたんだと思ふ。

そして体制、てやつはおそろしく抵抗力がなくなると腐敗するしかないと思ふんだ。(社会主義体制であろうと資本主義体制であろうと)そのため、自由とか民主主義は絶対に必要だと思ふ。そしてこの自由とか民主主義とかは「さうらぬ」と「さうらへん」にこぼれてるん

じやなく、我々自身がノンポリを脱し、批判的精神を保持していくことから以外には始まらないと思ふ。この自由・民主主義(自民党みたいだな)ってのは本来的に *sovereign* なものだと思う——体制制にも被支配制にも。

今の状況を見てみると、弁護士抜き法、司法の右傾化、有事立法、元号法制化……あ、またあんなじ文句のラレッツやなんぞと思わないで、ひとつひとつその意味を考えてみてほしい。今、「まあ、ど、ち、で、も、い、い、ん、じ、や、な、い、？」と言ってる、てことは戦前のあのフアシズム体制をひとつひとつ作っていった人々と同じことをやってるんじゃないのか。

「戦前」は、今とはぜんぜん別種の人間が作っていたんじゃないんだ。我々のほんの一世代前が作っていたのであり、けっしてみんなキチガイだったリバカだったリしたんじゃないこと。そして我々が奥に容易に流されていくこと。(自由だ自由だとい、ていながらほんとうは、もっと奥深くぞみごとと流されているのではないだろうか。)

自由・民主主義、てのは本来的に *sovereign* だと思ふ。与えられたものに順応するのではなく自ら作っていくこと。それはたしかにシンドライシ、責任は重い。

でも、もっと「か」こ悪く、ならなければ、自分からかかちうていかなければならぬと思ふ。だからもっと「元氣になろうよ」。もちろん独善や暴力に陥るのぞなく。

(531Ⅱ・投稿)

摩訶魯仁庵銳醉の

銳醉獨言

小生は元來「まじめ」な人ではないので、勤勉に講義に出席することなど来して出来ないのだが、それでも何らかの点で教室に足を向かわせる講義にはよくつきあう。一般的にいって駒場をみまわして、そういう講義というのはほとんどお目にかからない。足を向かわせるものにはいくつか要因があるように思うが、その中でも比較的大きな比重を占めるのは教官である。小生は昔から好奇心が旺盛で、そのため講義内容についてはかなり幅広く興味をもつので、よほどつまらないものは別として内容自体がつまらなくて足が向かわないということはさほど多くはない。やはり一番大きいのは教官である。小生が最も嫌うのは、学生にこびる教官である。「学生さん」に突っこないように、また無視されないように、おもしろくもなんともない冗談をふりまきながら結局何が言いたいのかさっぱりわからない教官。逆に、比較的好きが持てるのは、自分の考えをまっぴらんと出してくる教官。変に学生にこびようとしない教官である。むしろあまりに独善的なのは困りものであるが、だいたいにおいてストレートに自分の考えをしゃべる人は、一定の謙虚さをもちあわせているような気がする。ただ一言しておかぬばならないのは、自分の考えをストレートに出せない（出さないのではない）人もいて、それは言葉まかえれば照れ屋ともいえよう。そういう人と出さない人とは全く違うということである。出さない人の中には自分の考えなど持たない人もいるだろうが、（必死で考えぬいてわからないのなら、わからないうというのがある）（必死で考えぬいてわからないのなら、わからないうというのがある）（必死で考えぬいてわからないのなら、わからないうというのがある）（必死で考えぬいてわからないのなら、わからないうというのがある）（必死で考えぬいてわからないのなら、わからないうというのがある）

であり、そういう人にはまた別の親しみを感じたりもする。尤にいやなのは、（清少納言並みになってきたようだが）おあらかせに欠ける教官である。なんというか、非常に神経質でさいなことにこだわる人は結構多い。むしろ科学における概念規定と、その正しい伝達の困難さ、誤解のもつ恐れしさを身にしみて感じているというふうな事情はあろうが、聴く方はみなそんな考証学的研究に一生をささげようとするものばかりではないのだから、わかりやすくおあらかにへこれは決してあいまいにという意味ではない（講じてもよいと思うのだが）。

勝手なことな恥づかしげもなく書いたけれど、もともと小生の講義に対する不熱心さ、要するに面倒くさがる性質が、勝手なひとりとごを生きみだすのであって、結論的には、この物見遊山の態度を改めなくてはいかなあ、と認識するということになるのである。



「今」との対峙

飛び散る火花をつかまえたい
その火花が消え去らない内に

守りたいーふるえる心の襖を
心の襖を磨耗させたくはない

濃密な時の流れに身をひたしたい

すべてはwollenの世界

wollenからsollenへ

今がその時

sollenからwollenへ

その時も今

弁証法的めくるめく展開のstage

限りある生との激烈なる闘争

stageに上る時は今

眞の東大変革とは何か

上月 健輔

「処分に反対する連絡会」に参加するものとして

1 文学部問題

今、東大を語る時、文学部を中心とした反百年祭闘争を抜きにしては語れないであろう。現在、学内での反対運動の高まりによって一応鎮座した形になつてゐる百億円募金は77年4月12日の百年祭記念式典をきつかけに（下準備は東大闘争以前から進められていた）行なわれてゐるものであり、「公害企業からでもとにかく金をくねるならどこからでも金をもらつ」といった形のもので、民青系諸君の固執する十編目確認書（全構成員自治の立場からすらも決して認めることのできない筈のものである。今の「東大」というものの存在意義に疑問をもつものならば当然断固たる反対の意志を表明すべきであらう）。

しかし、当時の自治会の大多数を占める民青系執行部は弱々しい反対の声をあげるばかりで、当局の独断に何ら抵抗を示すことができなかった。77年2月16日結成された百年祭糾弾全学実行委員会（以下全学実行）に続集した文学部学生院生有志（以下文有志）は、77年4月から山本信文学部長に対し団交を開始し、討論の過程で文学部早島募金委員は、現在の募金推進連絡委員会には問題がある」と募金委員を辞任、山本文学部長も「公害・労災・職業病等を考へれば企業の中には企業の論理だけで動いてゐるものもあり、それは生産を自己目的とし、人間・労働者を手段としてのみ扱うものであり問題がある。このような企業からは大学として募金を行うべきでない」ということを認めるにいたつた。さらに9月26日以来文学部で

行なわれた署名は如きこえ、ついに10月26日、山本文学部長は署名を尊重し募金に協力しない事を表明し、自らの署名入りで公的な機関たる学内広報に掲載したのである。（10・26声明）この交渉を民青系諸君は、文学部長へのつるしあげ」と言う。しかしこの間、文有志と山本文学部長との交渉は10回に及ぶ。もし仮に文有志が暴力をふるい、山本文学部長を拷問にかけたのなら、とくに交渉は打ち切られてゐるはずだ。このことを先ず確認しておきたい。

10・26声明に対し、全学一致の募金協力体制」の崩壊を憂えた向坊総長室は、山本文学部長に圧力をかけ、「あれは私的なものである」といつた声明を行なひさしめ、さらに「人間ドック入り」なる病名（？）をもつて自宅謹慎に追い込んだ。山本氏にかけつて登場した柴田文学部長代理は、「文学部には既に募金協力体制があつた」として10・26確認空洞化に遷延するという暴挙にでたため、文有志は最低限の抵抗権の発動として文学部長室長室全入りこみに突入したのである。ひたすら団交を迷走してゐた柴田文学部長代理は、2月27日、ついに、「この事態を」話しあひで解決することを確認しながらも、3月2日20名余の機動隊を講入、闘争を圧殺せんとした。しかし3月9日、文有志は再び全入りこみを行ない、文教授会の責任を追求した。9月22日までつゞく文学部長室全入り込みはここに始まるのである。民青系諸君は此を不法占拠という。しかし、一切の話し合いに及ばない柴田代理に対し、一休他にいかなる異議申し立ての方法があるか。この間も募金は集められてゐるのである。

4月1日、文学部長に東大闘争以来一貫した超タカ派の今道友信

氏が就任した。今道新文学部長は就任直後さうぞく本願を發揮し、5月1日秘密裡に辻村明を募金委員に任命する。さらに5・18、5・26の歴史的な学大(9年ぶり成立99)をうけ、とりくまれた田交への折衝でも様々なイチャモンをつけ、何とか学生の迫及から逃たしようとした。ここにいたって文・田交は5・22、23のストを決行、4回に及ぶ予備折衝をねばりずよく行ない、ついに6月23日田交の実現を勝ちとった。しかしこの田交において今道新文学部長は、「教授会側の考えを浸透させるため交渉に応じた」、「学生の二項自要求には何といても応諾できない」、「教授会では募金問題に關して討論したことはない。唯、文学部は一貫し、募金協力体制をとってきているのである」と、学生は一切の反対を無視したいなおりを続け、いまづまると抽象論をばしまくって時間切れを図ったのである。6・29田交においても同様で、7・7田交において田交直前の浜川教授の「学生が教授を排除した」(田交をタカ派でかためたのは教授会側だ)という不当きまりない発言で空転し徹夜に及んだ。この事態を一方的に学生の責任と決めつけ、7月10日に予定されていた田交を当日一方的に中止通告し、以後の折衝で7月28日に確約された田交を前日「学生の陳謝」がなければやらないと、またもや一方的に中止を宣言するのである。これはまさしく、田交逃亡・夏休み抜け込みの画策といえよう。

8月23日、今道は文学部長室に登場、「傷つく前に出てゆけ」と発言、これを強引に8月31日付けの退去通告と言ひなし、9月1日以降不法占拠論をもちだしているのである。このような中で9・22文学部長室火災がおきる。当日AM500自主管理を團う東大病院北病棟でベルがなる。AM600火災ベル発報、「豊学部が火事だ」と男の姿で警備本部に通報、60番防車10台ぐらいが豊学部に入り、60に文学部到着、73に鐘火、1時現場検証。出火場所については、当日午後では第二会議室より出火とされたが、その後、執務室とされる、と不審な点が多い。(以上、文学友会の資料より抜粋)しかし、今道は

これを弾圧の絶好の口実とみなし、9月22日文ホール学友会委員長室を立入禁止にし、24日夕方着數十枚の破壊、25日反彈圧集会への文教授会及び本部幹部職員数十名の暴行、26日文学部会館の5時口ックアウトを行ない、今道第二文書(9・23)では、「出火の原因が明らかになるのをまてその責任を徹底的に糾明する」と処分をほのめかしている。しかし、本富士署が出火原因不明と言うや否や9月29日第三文書において、「出火の原因が何であれ学生の責任は免れない」と明白な政治弾圧であることを暴露したのである。9・22時点での坐り込み闘争の責任者は一体だれか、田交を拒否しつづけた今道自身ではなかったのからなあ、日共系諸君から「焼肉パーティー」「泥酔してとまり込む」なるデマが行なわれているが、「焼肉パーティー」とは食事のためラーメンに入れる肉をフライパンでいためていたのが真相であり、また、泥酔して云々とされている人物は、僕もよく知っている人で日本酒5合のんで平然としていたバケモノ、オレはだれが何と云った、まあその人が泥酔するということ、は信じられんし、本人はタバコもすらん、従ってねたはこもせん、火災のおそれなし。この点を確認しろ。

9・22火災以後、歴史的処分復活を阻止するため、駒場で今道の運動より、より広いワケで「処分」に反対する連絡会が結成され、また職員、教員、労働者層を含む幅広い闘争がくまれ、11・15、12・6集会が成功し78年内処分は阻止された。

12月29日付信報毎日新聞、南日本新聞等によれば、本郷消防署は出火の原因不明なる最終判定書を出したことが明らかになった。(中央のマスコミでは一切報道されでない)1・9今道文書では、77年山本前文学部長との交渉、78年7月の田交、9・22火災以後の弾圧への抵抗の一切を「学生の本分に反する行為」として処分を行なおうとしている。さらに権力はカセのついでにいた裁判法26条をひっぱりだし、被告もいないのに裁判を行うこととして、証人として今道被疑者としてあつかわれてきたものの換問を行ってきた。我々は

これに対し1・18全国集会、2・17司法の反動化を許す学芸市民集会を戦い、そして文教協会・学部長会議、評議会への直及行動を貫徹し、処分闘争を次々と粉砕していった。

一方、文学部学生ホール学友会室はその後の戦いで、7時までの使用をがちとこっていた。しかし、7時から電源が切られるという事態で、7時ロックアウト状態であった。これは文学友会5月常任委員会の活動に大きな支障をきたすものであり、学生の間接権への重大な侵害であった。これに対し2・3から文学友会委員長他3名がハンストを行ない、全学でこれを支援した。しかし、2・14「不法占拠」排除のための機動隊が導入され、10月26日の今道直及の際の暴行を名目に3学友が今道直及まで逮捕されている。(12・26の際には学生2名に対しほぼ同数の中隊がいて、とても暴行をふるえるような状況でないことを文学部の教授も認めている。12・26はガバ職によって一学友が時計台に拉致され、なぐる、けるの暴行をふるわれた。暴行をつけたのは学生側なのだ。いまままた処分の発動を逮捕によってかえる気が、それとも二重の打撃によって闘争圧殺を図っているのか。ともかく、3学友は1日10時間にも及ぶ訊問をうけた後、うち一名が3月8日傷害罪(今道は暴行の結果煽発性心室期外収縮という病気になる)と言っている。しかしこれは驚いたので心臓がドキドキするというだけのことなのだ。まさにギャクあげ起訴の極致といえよう)で起訴されたのだ。文学部の問題は反百斤衆闘争を通じてのみ明確になる。そしてその視野は4・28文部次官通告(1)学内施設を本来の用途以外には使わせるな。(2)社会秩序破壊をよびかける立憲はただちに撤去せよ。(3)学生の修業義務の把握、教職員の仕事規律の厳正な保持。(4)警察の捜査活動に積極的に協力せよ。)を通じて、新大管法にむけた布石、中教審型大学構想への道としてとらえられるものである。従って我々はこれを文学部問題として矮小化せず、大きな道程の中で真に人間的存在としての自己を生み出すための闘争として位置づけるべきである。

2 学問と自己の発見のために

過去、そして現在を通じて、我々は一体いかなる存在であったか。受験のための勉強を受主体的に消化し、まあ将来いい身分につけるだろうとなんとなく思って、東大にきて「どの大学？」ときかれれば東大とこたえるのに一瞬の恥らしいを感じる自分。最近の視聴者参加番組で東大生が出てくるたびにせい一杯ぶつけて自分は「エリート」ではないことを誇示しつつ、結局エリートにおちいつてしまふ。みんな同じなんだ。「東大生」というオレの属性でオレを判断するな。オレはオレ自身なのだ、といたいんだ。しかし、オレ自身といても一体何がある？確かに個人的な趣味をあげつらえばいくらでもある。歴史への興味、ギリシア文学への嗜好、高橋和己。しかしそれは自分の本質を示したものでない。結局、受験とかエリートという心理的な存在から迷走するための手段でしかなかったような気がする。これはどうしても認めたくないことであるが、僕自身、現代の教育体制の中、受験のテクニックとしての勉強をやつてゆく中で自己の主体性を自然に失つてゆき、バラバラに個性を分解された「人杖」として大学におくりにまわってきたのではないか。生徒としてありながら、その生産するなりち自己実現の場である学問においてその主体性が全く失われているというこの矛盾、それはまさに学問における疎外と呼べよう。即ち、ある事象を問題提起としてとらえ、その解決に主体的にとりくむということなしに、その理論から出発し、再び広義の理論にまいもどるといふ閉鎖された自分が全く問われない形での学問営為の中において、人間はそのサイクルの一環としての情報処理装置でしかありえない。ここにまさしく近代の知性の反主体性があり、それ故我々が「何故勉強するのか」を問うた時、出世のためとかあるいはせいせい「巨量的」知識人となるため、とか言えないのである。では、そこから脱出するには、今陥っている完全な無気力状態から自己を解放するにはどう

すればいいのか。わかりきったことだが自分のみじめさを自覚し、その周廻的自己規定(東大生「エリート」を徹底的に否定しつづけること)によって裸の自己を外にむかつて投げだし自らの手で状況をさりひらく闘いから主体性を回復する道しかありえない。医学部の登録医制度粉碎「自主カリキュラム決定をめざす闘いに誘発され、東大解体」「現実にはありえない、そしてまた真にあるべき大学」をめぐって闘った東大闘争とはまさしくそのような闘いであった。(「民青系諸君の言うような「夢内民主化」のための闘争ではないのである。つまり、真に体制に対し批判的な大学をつくり出す具体的な闘いの中に我々の生産点奪還・主体性回復の道があるのである。

だが、現実の大学とはいかなる存在であるか。民青系諸君はここでは、「いい東大生も悪い東大生もいる」と社会内存在としての大学の存在を甚置を全く問うことなく個人としての意識の問題を矮小化している。しかし、創立以来国家の官僚養成機構及び体制(「国家及び大企業」)のための研究機構として、「帝国主義大学」の機能を果たしてきたのが東大の存在であり、さらに、大学ヒエラルキーの頂点に立つものとして、受験競争の象徴的存在であることは、「東大一直線」を引用するまでもない。我々は先ず東大という存在、東大生たる自己を問うことから出発しなければならぬ。安直に「いい東大生」とか「民主的知識人」とか「アロレタリアートの前衛」などと自己を規定するのは全くの欺瞞である。

では、具体的な方法論として、いかなる方法があるのか。民青系諸君は我々のことを「トロツキスト」とか「極左暴力集団」と一方的にきめつけ、我々の行動の一切を挑発とみなし、ヤツラが挑発を行うから自治活動が侵害されるのである、と言う。しかし、例えば民青の牛耳る駒場の例をとっても、当局と明確に結びついた原理の登場、2・1代大の教室貸し出し規制、オリ期間の短縮など自治活動への締めつけが明らかになつていてではないか。そしてそれは単なる偶発事ではなく、大場学生部長が「総長室は学部共通規則の全

面的改革を行おうとしている」といったこと、即ち総長室による学内管理体制の強化の中で初めて位置づけられ、それは百年祭記念事業による東大の再編・合理化の一環として、新大管法への発議の中でとらえねばならない。即ち彼らの目的が学内管理強化即ち我々を完全な「人材」「研究器械」にしたてあげることである以上、我々は断固としてこれを阻止しなければならぬ。文芸部長室至り込み闘争があつて後、処分が出され管理強化が目論まれているのではなく、管理強化が初めからの目標なのである。文芸部の闘いは、これから当局の動きを顕在化させ、全夢の仲間に関し、闘いの輪をひろげてゆくなかで断固として阻止してきたのである。仮りに文芸部の闘いがなければ、民青系軟弱自治会と当局とのボス交の中でもっと陰湿な形で行なわれてしまつたであろう。民青諸君に問う、東京教育大は一部挑発者がいたから筑波に移転させられたのか。それとも移転→再編は当局の方針だったのか。

今、我々のまわりには一応の自由がある。しかしそれは、我々が「人材」であり、またそうあることに満足していることによつて与えられている畜群としての自由である。我々は正しく「緩慢な死」の状態にある。一度自らの存在を問ひ、人固たろうとする叫びをあげたならば、今回のようにゲバ隊の暴行、権力の導入、逮捕→ゲッ千上げ起訴、そして処分というありとあらゆる弾圧がまつているのである。今、諸君らは瀬戸際にいる。一応の安定した今の生活に安住し、やがて締めつけの強化のなかで完全な「人材」となつてしまふのか。それとも人間の大地を自ぎつて大きく飛翔するのか。

すべての学友諸君、如分に反対する連絡会を決して民青のいうような暴力集団ではない。今まで反百年反募金を闘つてきた人よりもっと広い形でつくられた個人の主体性から成り立つ一つ運動体である。君は君自身の主体性以外何も束縛されるものはない。即ち、自由と責任を兼ねそなえ、状況と自らの手で切りひらいてゆくという真の人間の自由がある。すべての学友が「如分に反対する連絡会、

に結集し、反刃分、反新大管法の開いを主体的に構築して中かれんことを強く訴えたい。



※これは全く僕の個人的な意見であり、ここに書いた内容は決して刃反逆の公式見解ではない。(53L1)

映画評論

若松の最近 宮台真司

若松孝二の最新作ではなからうかと思うが「残忍連続強盗魔」を見た。

主人公の二人の若い男が、次々と女殺しを重ねて行くところなど、かつての「犯された白衣」(脚本・唐十郎と若松、主演・唐十郎)をほうふつさせる点が多かった。だが一見したところ、「犯された白衣」とは女殺しのmatadorが異なっている。

「犯された白衣」の主人公は、真制の母性の追求者として描かれていた。主人公の若者(唐十郎)にとり、真制母性の象徴として海が在り、彼は時には海鳴りを幻聴しさえした。真制母性の極とは対極に、「白衣の天使」すなわち看護婦が擬制母性の象徴として主人公には映じた。ゆえに白衣の天使を虐殺することは擬制の正体を暴くことであり、真制母性をかざることであった。真制は擬制の血であがなれる以外になかったわけである。結局真制母性は単に幻想としてしか在り得ぬ事を暗示する形で映画は終わる。だが、純化された真制母性志向が擬制の正に擬制にすぎぬ正体を見破る武器であることを、映画のラストにどう入された現実の60年代末のカットが明確化した。すなわちイデオロギー的な位相としては、この映画はマルクーゼの立場に立つものとして見て不合理はない。そこから導き出せるのは、この映画が60年代末に大衆的に受けた理由のカー

は、イデオロギー的な正当性ではなくして、その女殺しのmatadorが真制母性志向の心理であり、この局面での映画の内在的な構造が、当時の若者の心理的構造に重なったからに相違ないであろう。そう考える根拠は、その映画が僕を感銘させたのも同一の理由であることによる。幻想の質として見る場合、この映画はミンコフスキーのいわゆる癡てんかん質的幻想形態であると分類することができる。丁度てんかん発作直前の高揚状態が、心的時間化度の対照正常領域からの著しい低下、すなわちエントロピーの自然状態への接近であり、しかもそれが個体としての人間の死を意味するが故に一過的なものとなるのと同様、この映画がうけた同時代の人々の類てんかん質的な幻想も、やはり一過的なものとならざるを得ない。すなわち、いわゆる「連体」幻想は、構造的に時期がくれば終息することが運命付けられているのだ。

かかる母性志向が挫折したあとに、父性志向がおとざれる。心理的な変遷としては合理的である。「残忍連続強盗魔」の主人公たちは父権志向者である。主人公たちは戦争に憧れている。ミリタリールックのいでたちで、女を殺しまくる。彼らの部屋には、ボスターがベタベタとはりつけてある。戦闘機の特大ボスターの前にあかれたベッドで、軍艦マーチに合わせて、女をいたぶる。いわゆる母性は、彼らにとりては憎悪の対象である。真制母性への志向はない。従ってすべての女は憎悪の対象である。女は快楽の道具でしかなく、使いおければ殺すのみである。彼らには、父権志向のもって行き場がない。あらゆるカリスマが死んだのである。だから、おのれ自身

の強さを鏡によって確認していくより他にない。ここでは女殺しの motive は明らかに「犯された白衣」とは異なる。たば、フロイトの神経症患者への分析が示すように、この母性への憎悪は母性への愛着と共に存在すると見るべきであろう。丁度、サディズムの心的構造と同じである。今日の時代性と重ねあわせるとき、「残忍……」の主人公の行動は、合理性をもっている。

だが、まさにどつてつけたように、ラストシーンで若松は主人公らを嘲笑する。主人公の男たちが、一人の女を海岸で乱暴しようとしているとき、彼らの前に労働者風の老人が出現し、彼らをたしなめるのである。

「おまえら、格好だけで戦争にあこがれるな？ そんなに人間をいたぶりたいなら、この俺をいたぶってみい。」
と男は主人公たちに迫る。主人公たちは、男の迫力に敗けて、ちりぢりになってしまふ。若松は何を示したかったのだろう。この労働者風の男は、空拍子もなく、父親のように出現する。そのとき我々は、主人公たちに欠けていたものが「父親」であったことを気づかされる。さらに、この今日の場合の中に「父親」が皆無であることに愕然とするのである。若松は、「父親」の欠如がフアシズムの温床を形作ることを訴えたようにも見える。

だが、そうとってみても、何か釈然としないわけばかりが残る。この映画には、救いがないのである。「犯された白衣」も「ゆけゆけ二度目の処女」も、僕らの内面的な母性願望をみごとにすくい上げてくれた。たとえ幻想にすぎないにせよ、そして幻想にしからずがないことを若松が示してしまっているが、「真制の母性」の所在をつけ知らせていた。この「残忍……」には、そうしたところは皆無であるし、一方、父性志向を否定してしまっている。出口をふさがれてしまったような感じを、この映画を見たあと僕は持ち続けた。

(53LIII)

— ☆ 前号クロスワード解答 ☆ —

コ	ク	サイ	レン	メイ	ア
イ	サン	イ	イ	ヌ	ゴ
ル	ケ	イ	コ	ウ	テイ
イ	コ	ミ	イ	エ	エ
オ	バ	ケ	ノ	キ	ユ
ウ	タ	ロ	ウ	タ	ロ
チ	ヤ	ミ	リン	カイ	チ
カ	タ	キ	カ	テ	カ
タ	テ	テン	ピン	ソ	ウ
マ	イ	シ	ソ	ウ	ジ
リ	エ	キ	シ	マ	カイ
ド	ン				

〈解説〉

ACROSS

- 11. ON → NOの反対 → YES → 肯定
- 22. カシ → 榎 → 聖木
- 27. Libra → ラテン語で天秤座のこと
- 31. テニス → ゴルフ

DOWN

- 2. スワニー河 → フォスター → 草競馬
- 3. 銅 → 金銀銅 → 3位
- 15. 3番 → ベートーベンの3番
- 27. 枕草子 → 中宮定子

★前回のクロスワード、いかがでしたか？「楽しいドライブ → メイティウンテン」
なんて実におもしろいですね(自画自賛)。今回は懸賞つきです(47ページ)。

モーパッサン 迫田英典

—自然主義の落し子として—

十九世紀フランス文壇を概観してみると、思はず息をのむのは果たして私一人であろうか。これほど俊英・秀才が続々と登場し、近現代の文学に大きな影響を及ぼしている様は、他に、わずかに十九世紀中葉から二十世紀初頭にかけてのロシア一國において見るのみであると言つてよい。いちいち名前を挙げるのもおこがましい程著名な作家が自白押しなのである。そのものすこさに私は圧倒され目を見張る。

だが、こうした世界文学史上ひときわ高い峰々の中で、その才能と人物像が非常に誤解されている作家が、もし、いるとしたら、それは誰であらうか——。ギード・モーパッサン(Guy de Maupassant)の名を挙げるのに、私は逡巡しない。三十才で華々しく文壇にデビューしてから十年の間、全精力を文学と享樂とに使い、空然に発狂して遂には精神病院で逝つたモーパッサンは、あまりに誤解されずギョウゴウするように思える。彼は、偉大な人物がしばしばこうであるという、教科書的な一面的な理解では、決してそのすべてを理解したことにはならない作家なのである。

モーパッサンの教科書的な一面的理解とは、言うまでもなく世に瀟漫こころでつづろの、「モーパッサン＝自然主義作家」という図

式を指す。この図式はそれなりの意味を有していて、一概に誤りだとは言えないのも事実であるが、これはあくまで一面的な理解であつて、もしこれのみを以て事足りしとしたら、モーパッサンの評価において著しく不当なものと言わねばならないのである。事実、彼の主要な作品をほとんど読み終つた時、私はこの図式に信頼を置くのをやめた。「何か」がこの図式には欠けている、と思つたのである。

その「何か」とは一体何か、モーパッサン自らを誤解せしめてくる彼独特の「何か」とは、どんな實質なのであろうか——。

一、自然主義とは

モーパッサン自身について検討する前に、彼がその代表的人物とされている自然主義という文学上の流派を見ておくことは、決して無駄ではない。

自然主義は、十九世紀後半にフランスでおこつた後世界を席捲して行つた文芸思潮であつて、例えは日本ではそれが明治二十年代に小杉天外、永井荷風らによつてもたらされて以後、島崎藤村、田山花袋、国木田独步、徳田秋声、正村白鳥らが輩出して一時期を画

したのは、周知のとおりである。日本以外の作家でも、ハーディ、ハウストマン、イブセン、ストリンドベリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、ドライサーらが多大な影響を受けており、その広域性でも影響の大ききをも、十九世紀初頭のバイロニスムをはるかに凌駕するものと言つてよい。その主張は同世紀前半以来の写実主義の延長にあり、「実証的自然科学的方法の導入」、「主観の排除」、「解剖的分析」などを標榜していた。そして、根源的にはスタントール、オノレ・ド・ベルザック、直接的には、ギュスターヴ・フロバール、ゴンクール兄弟等に通じていたのである。

以上が自然主義の概観である。果たしてモーパッサンはこのような自然主義作家としてより他の特徴を持つていたのであろうか。

二、『脂肪の塊』から

モーパッサンについて語るべき、何よりも著とすことのできない作品は、事實上彼の文壇へのデビュー作となった『脂肪の塊』である。この著名な作品を祖上にのぼせて、彼の文学の特徴を明らかにしてみたい。

これはモーパッサン三十才の時の作品で、当時隆盛の途にあつた自然主義の雄、エミール・ゾラが、普仏戦争をテーマに自分と弟子の作品を集めて編んだ『メタンの夕べ』という短編集の中に発表されたものである。この作品こそは、モーパッサン自身が師と仰ぐフロバールからも激賞され、彼の名を一躍高からしめて、「文壇の寵児」とも「鬼才」とも喧伝されるという結果を招来した。彼に比べては記念碑的な作品となつたのである。

物語は、普仏戦争時に、プロシア軍に占領されてゐるフランスの町から、一台の乗合馬車が雪の夜陰に乗じて抜け出すところから始まる。その中には、貴族・議員・裕福な商人・民主主義實現を目指す活動家・尼僧のほか、脂肪の塊(フロバール・スイフ)と異名をとる娼婦が乗り合わせていた。当初、その娼婦を軽蔑して口

をきかなかつた他の者たちであつたが、彼女が手回し良く準備していた弁当をわけ与えてもらつたことから、ようやく話をするようになる。この馬車がある町を通過しようとした時、その町を占領していたプロシア軍の士官がこの娼婦に目をつけて、一夜をともにしなければ馬車を通さない、と横車を押す。熱烈な愛国者である娼婦はこれを拒否するが、乗り合わせた他の者たちは、一同こぞつて自らを犠牲にして他を救ふことの勇気を説いて聞かせる。娼婦は遂に、怯々ながらプロシア軍士官のもとへ行く。この結果、馬車はこの町を通過できるが、他の者たちは、今度はその娼婦を軽蔑して自分たちが用意した弁当もわけやらない。娼婦は落涙していつまでもすり泣くが、傍では活動家が革命歌を高吟し、馬車は雪の夜道を走り続けて行く……。

この『脂肪の塊』の中には、後年大をなすモーパッサンの、多くの作品の底を流れてゐるいくつかの特徴があるので挙げてみたいと思ふ。

まず、考えめかれた要素構成の妙があること。つまり堅固にして緻密であり、要素そのものが緊密に関連してあつていて無駄が無いのである。

例えば、前述の乗合馬車の乗客をとつてみると、そこに社会の縮図とも言つべきものが見い出せることに気づくのである。身分の貴賤(上流階級の人と娼婦)、保守主義と単進主義(上流階級の人と民主主義の活動家)、超世俗の人と世俗の人(尼と他の人々)と、明瞭に対比され得る様々な類型的人間が、一つの乗合馬車に放り込まれてゐるのである。このこと、この作品に中短編としては異例の深みを付与してゐる。しかもこうした、言わば特殊な状況が、「普仏戦争の際に、占領された町を脱出する乗合馬車」という説得力のある設定のため、本来同席するはずのない人々が同席して何ら異知感なく受け容れられ得ることも注目し得る。こうした一種の特殊な状況は、それが作り出される原因が誰にこそ抵抗なく受け容

られなければ絵空事になつて、作品そのものに厚みを与えないものであるが、ここにはそれが奥にうまうまいつこり、アルペール・カミュの『ペスト』同様、作者の巧みがある（『ペスト』では、北アフリカのある町でペストが流行したため町全体が外の世界から隔離されることになつて、医師や牧師や新聞記者や犯罪者等、それこそ社会のありとあらゆる類型の人間が、その中々様々な行動を要求されるようになったことを想起してほしい）。モーパッサンの綿密な計算が奏巧していろいろである。

また、この作品中最も印象的とも言うべき場面である、最後の場面は実に暗示に富んでいてすばらしい。じつとすすり泣く娼婦の声と、高らかな活動家の革命歌が交りつ、一つの馬車に揺られて雪の夜道を走つて行くこの情景は、結局のところ作品の内容を一箇所に凝縮したものと云つて良い。これを作品の結尾部に置いて主題を再確認させつつ、余韻を長く引かせるあたり、心憎いばかりで、モーパッサンの要素構成の巧みさを示す好例と言へるのではあるまいか。

次に、以上のことと強い関連があるのであるが、作品のプロットの自然さによつて筋の展開が極めて自然に流れ、ほとんど立ち止まるどころが全く無いことにも、モーパッサンの卓越した才能が見られるのである。ちやうど古典派の交響曲のように、しつかりした枠組と旋律の扱いが作品中にあり、まことに見事である。

全体の展開を楽曲に擬すると次のようにならう。ルーアンの町の豊田宛の描写が序奏部で、場面が馬車の中に移るといふのが主要部の開始となり、次第にクレッシェンドして行く宿屋の場面でクライマックスになり、最後に再び馬車の馬車の場面に戻つてコーダが長く余韻をひいて結びとなる……。これは漢詩の絶句や、もつと身近な例で言えば四コマ漫画と同様に、見事な起承転結（起……ルーアンの町、承……馬車の中、転……宿屋、結……馬車の中）の標本であると言える。とりわけ承と結がともに馬車の中の場面といつて設定であ

りながら、中の乗客らの心情は全く異なつていて対照が鮮かだ。こうしたプロットのため、この『脂肪の塊』は、讀者をして最後まで一気に読ましむる力を有している。言わば作者モーパッサンのストーリーテラーとしての才能といふことになるのであるが、この才能は長編においても決して隠蔽されることのないのは、『ドエールとジャン』のような作品を讀んでみればすぐわかることである。以上、モーパッサンの特徴について二点ほど述べた。しかし、この作品にはもっと顯著なより重要な彼の特徴が表われている。そのことについて以下述べてみたい。

何といつても明瞭なのは、自然主義的特徴であらう。上流階級の者たちに対する痛烈な批判がここにはある。立派な地位や身分があつても、その心はエゴイストの塊なのだといふことを暴露するモーパッサンの筆は、いかに鋭い。しかし、この作品はさうした自然主義的特徴だけで成りたつてゐるのではない。それが証拠には、かくも哀切に、最後の娼婦のすすり泣きの声が、われわれの耳を捕えて離さないではないか。

私はその他の特徴として、『メロドラマ的要素』といふものをここで指摘しておきたい。であり。またそれは「お涙頂戴的要素」とも言い換へ得るものなのであつて、さうした要素は、モーパッサンが『悲劇のヒロイン』をこの作品に登場させたところから出てくると言つて良い。『脂肪の塊』の中の娼婦は、自身は何にも感じることをしてゐるわけではなく、いやそれどころか他の者達のために自己犠牲までしてゐるにもかかわらず泣くハメになる。まぎしく、『メロドラマ』の『悲劇のヒロイン』とならぶものはあるまいか。ちやうど、姑にイぢられる嫁のごとく、兄頼朝から追つ手を差し向けられる義経のごとく、また、清純であるが故にリア王から抑壓に扱われるコーディリアの如く、娼婦の涙は讀者の胸を打つのである。こうした、自分自身には責任のない不幸を「責任無き悲劇」と呼ぶなら、この『責任なき悲劇』のため、『脂肪の塊』は非常にロマン的

な勇闘気を持つこととなるのである。それと同時に、血も涙もある作者のモーパッサンの姿が浮かび上がって来るというものである。

「責任なき悲劇」性が無ければ、つまり、「自業自得の悲劇」であれば、こうしたロマン的な勇闘気は望むべくもないのは自明のことであろう。新しい比較例として芥川竜之介の作品で、やはり人間のエゴイズムを鋭くえぐった佳編「蜘蛛の糸」を挙げる。この中の主人公樗陀多は、蜘蛛の糸によって地獄から救われさうになるが、寸前のところで自らのエゴイズムのために再び地獄に落ちるのであった。この作品の中には、読者の涙をそそるような人物はない。確かに樗陀多に同情する人はあろう。しかしながら彼は自業自得なのである。『脂肪の塊』の娼婦とはわけが違う。そのため読者も彼に同情して涙を流すよりもむしろ、彼と同様のエゴイズムを自らの中に見出し出してソックとする方が先なのであるまいか。少くとも「責任なき悲劇」のメウなロマン性を窺い出すことは不可能のように思われるのである。

さて、こうした「悲劇のヒロイン」に對置する存在、すなわち娼婦以外の馬車の乗客に對するモーパッサンの姿勢はどうなのであろうか。前述した様に、そこにはかなり明瞭な自然主義的特徴が見い出せるのは事実である。しかしながら、「主観の排除」とか、「解剖的分析」といふような、冷めた、対象と距離を置いて眺めるような姿勢とを、モーパッサンの場合は少し違つて思えてならない。確かに表面上は冷静で淡々としているが、その奥、上流階級に對する侮辱は容赦なくこれでもかこれでもかとは水りに欺瞞を暴いていく。思うに、これはモーパッサン自身の娼婦に對する思い入れ、換言すれば同情があつたからではなからうか。この小説にロマン的な勇闘気を与えた際に浮かび上がった来た作者モーパッサンは、ここでも再び人間に差々とした筆の運びの背後に、弄かんていふやうに思えてならないのである。

この作品におけるモーパッサンの上流階級に對する姿勢は、手ぎ

びしい批判や揶揄を内包して、比喩的に言つたら、「下から上を見上げる姿勢」といふことにならう。これは、決して上流階級に對しておびえたり、こびへつらつたりするといった意味なのではなく、逆に、下層階級の立場から主観に突き上げるといった意味の姿勢なのである。このように下層階級の者、ここでは娼婦、の立場に立ち得ているといふことこそが、モーパッサンの娼婦に對する感情移入の証明の如くに思える。後で詳しくは述べるが、これに對してソラの場合、労働者を描きながらも一定の距離を置いており、冷静な觀察に終始してこのモーパッサンとはかなりの相違を見せるが、それは結局のところソラに、モーパッサンのような感情移入が作品に表われないからであらう。

モーパッサンがいかに上流階級を攻撃し、また娼婦に同情を寄せていたかを見ることにする。前述の通り、『脂肪の塊』の乗客馬車には様々な乗客がおり、彼らは身分の貴賤・保守と革新・世俗と超俗といった様々な断面で切ることができるのであった。しかしモーパッサンは、これらいずれの基準も彼らを類別することもなく、エゴイズムといふ人間の真に内面的かつ本質的な一点で、截然と彼らを分かつて見せるのである。身分や財産や「主義」といつた、人間の衣裝をすべて、ざ取られた時の人間の眞の、多様な姿は、愚かしくもあり、また気高くもある。それをモーパッサンはあますなく書きつづける。そのことは、今まで衣裝によつてのみ美しく高貴だった上流階級の者の眈め、辱しめに他ならず、衣裝は粗末でも眞に気高い者の贅美に他ならないのである。

初めは軽蔑していた娼婦が弁当を用意して来ており、それをわけてもらえらるとなると態度を豹変させて話を始めた御婦人連。遠慮しながらも食欲に負けて簡単に落魄し分け前に争つた伯爵。勧められると御礼もそこそこ猛然と食べ始めた尼僧たち。何と「立派な」人達であらうか。普單に足止めを食つて宿屋に滞在していた時、娼婦を自分の部屋に引つ張り込めようとした民主主義の騎士。それを、

敵兵のいる所では、と拒否した娼婦の態度に思わず泣きかえられたその様、すばらしい「祖国愛」の闘士ではある。初めは娼婦同様、さんざんに普軍を罵倒し辱罵していたのに、娼婦の体を引き換えて出発ができてなるほど。急に自己犠牲の尊厳を説く人々の御都合主義。そして他の者たちのために普軍士官と一夜を共にした娼婦を再び蔑み、弁当さえわけやらない、人々のエゴイズム。

このように、モーパッサンは随所に娼婦以外の人間の赤裸々な醜い姿を、散りばめているのである。

その一方、身分こそ低いが、気丈で祖国愛は誰にもひけをとらない娼婦には、彼は好意的である。エゴイズムを出した「憤いさん」達に對する激しい憤りを意識して抑制しつつ、時には押論したような筆致で描いていることの反動なのであろう。フロリア軍 蛇蝎のごとく忌み嫌う娼婦の、フランス国民としての気高さ、それであるが故に、フロリア軍士官のもとへ行つた時の彼女のつらさ、そして何より、再び出発した時の他の人々の、顔に唾を吐きかけてくるような仕打ちにじつと耐えようとこすすり泣く哀しさ。モーパッサンの描く娼婦の姿は美しく、気高く、そして哀しいが、それは、醜い他の人々との対比によつてより鮮烈になつてゐるのである。

このことは、恐らくモーパッサン自身の、上流階級の人々への軽蔑や憤りと、娼婦への同情とに無関係ではない。換言すれば、彼の「感情移入」が、作品の中に見出し得るといふことである。この「感情移入」といふことは、自然主義が標榜していた「主観の排除」とは全く背反の關係にあることは明瞭であらう。「モーパッサン＝自然主義作家」という図式が必ずしも正しくないのもまた、明白になるはずである。モーパッサンは表面「さ装々」としているが、その裏、心には何かフリフリと燃える熱いものを満ちあふれさせているのである。そしてそれが、モーパッサンをして完全に自然主義には做し切れなくせしめていたのである。それを「ヒューマンな感情」と名付けるとするならば、その「ヒューマンな感情」こそ、「モ

ーパッサン＝自然主義作家」という図式に欠けてゐる「何か」なのである。自然主義が、科學方能を背景とした冷めた描写といつたものを連想させる限りにおいて、モーパッサンとは縁遠いものだと云うことができる。彼に、ひんやりした無機物的名辭は似つかわしくないのである。

モーパッサンの『脂肪の塊』を用いて、彼の文学の特徴をいくつか指摘してみた。緻密な構成、ストーリーテラーとしての才能、自然主義作家的な鋭い洞察、そしてメロドラマ的要素、感情移入といつたことを挙げ、ヒューマンな感情を作品に込め、こもこもにじませてしまふ彼は、完全な自然主義作家とは言えないと言つた。この逆説的な言辭が、果たして「鬼面人を驚かす」式の詭弁にとどまるのかどうか。モーパッサン自身の他の作品や、他の作家と比較考察する必要がある。

三、『女の一生』『死のごとく強し』

恐らく彼の全作品の中で最も名高く、彼の代名詞のように人口に膾炙してゐるであろうところの作品『女の一生』をとりあげて、『脂肪の塊』の中に見られたような特徴があるかどうか考えたい。

この『女の一生』という作品は、『脂肪の塊』に遅れること三年、モーパッサンが当時の文壇で、完全に確固たる地歩を築くに至つた、彼自身の初の長編である。

人生に對して夢と期待を抱いて寄宿女学校を卒業した清純な娘シヤンヌであつたが、誠実な美男子だと信じて結婚したジュリアンは、実は非常な吝嗇家で、その上女中や人に次々と手を出すようなプレイボーイであつたので、彼女は次第に現実の醜さといふものを認識するやうになる。そのジュリアンは、不倫な恋のうちに愛人とともに死んでしまひ、シヤンヌの生き甲斐は一人息子

のポールだけとなる。しかし、ポールは長じては母の手から離れ、どこかの女にひつかかつて母親から次々と金を巻き上げていく。その結果遂に幼少時から住み慣れた屋敷まで手放すこととなったジャン又は、女中と二人のわび住まいで父も母も夫も死んだ孤独の中に、實際の年よりはずっと老い衰えていく……。

この作品には、『脂肪の塊』と異なつて、全編を貫く太い線のやうなもの余り感じられない。もちろん話の筋の一貫性はあるのだが、『脂肪の塊』のやうなガツリした枠組は無い。これは長編と短編(『脂肪の塊』はモーパッサン自身の超短編と比較すると中編と呼ぶべきかも知れないが、絶対的な分量から言えば短編と呼ぶ方が尤わしいと思われ)の性格の相異に、その原因と歸すべきであらう。モーパッサン自身の変化とは言い難い。その証拠に緻密な構想といた点では、彼は全く変わつていず、この短編を運んだやうな作品の一話一話に「聞かせろ」内容を盛り込んでいて、ストーリーテラーとしての才能も少しの衰えも見せていないのである。

そこで何より、『脂肪の塊』との類似点として目につくのは、「悲劇のヒロイン」の登場である。言うまでもなくジャンヌのことである。彼女は近頃の登壇目にかかるやうな人物、すなわち「どうしようもない自己の運命に弄ばれ没落していく女主人公」の役を、全編を通じて演じているわけで、大いに読者の同情や涙を誘ふのである。それが、『脂肪の塊』で指摘しておいた、「責任なき悲劇」に他ならないことは論を待たない。ジャンヌは、誠実な美男子に思えたリュリアンに対して、若い娘の汚れた愛情を傾ける。しかしながら彼は、女中のロザリーや人妻に次々と手を出して、彼女の愛情は完全に裏切られることになる。またリュリアンの死後、ジャンヌが絶望の愛情を注いだ息子のポールは、この馬の骨とちわからぬ女にひつかかり、母親の盲愛をよくに浪費を続け、ジャンヌの愛情はまたしても裏切られるのである。こうした運の状況において、彼女に直接的な責任は無い。多少の甘さはあるにしても、

それであるから余計に純粹な愛情を注ぐのであるが、そのたびごとに彼女は傷めつけられる。『脂肪の塊』の中の娼婦とジャンヌがこうした類似性を持つことによつて、この『女の一生』にも非常にロマンチックな要素が付与されていることは多言を要すまいはずである。

さらに、『脂肪の塊』でモーパッサンが追問させた「感情移入」というものが、この作品にも見い出せる。それが、「自然主義作家」と呼ばれる彼のこの作品に、それらからめ優しさ、悪く言えば意切らなさを与えていることに与つて力あるように思えるのである。ジャンヌの没落の様子を描く際にも、今たく突き放して見ているといった感じではない。

筋の展開の中で、例えば、ポールの浪費の度毎に始末をつけてくれたジャンヌの父の急死というものが登場するが、この時絶望の淵に立たされたジャンヌに、モーパッサンは救いの手を差し伸べている。かつて夫リュリアンと通姦を犯して放逐された文中ロザリーとの二十数年ぶりの出合いがそれである。彼女はジャンヌのもとに帰つて来、事態の収拾を図らうとする。それは一時的で部分的であるにせよ、ジャンヌにとつては救いであつたはずである。彼女の没落という運命への歯止めにはならなかつたが、彼女にとつては大きな慰めであつたことは事實であらう。もし、徹底的にジャンヌの没落を冷静に観察し尽くすことを目指すのなら、こうした展開はむしろ必要でない。筋の展開として不合理ではないが、必然性はないのである。

また、この作品の一番最後の場面でポールはジャンヌのもとに帰ることになるが、これもまた彼女にとつては救いであらう。この場合ももちろん全力的救済にはありえないが、いかにドラ息子とは言葉、いやひどいドラ息子であるかゆえに、母親にとつて何年かぶりの再会は大きな喜びであるはずである。今までは不運なことばかりであつたジャンヌであつたが、これから息子と二人、貧しいながら

も楽しい生活が営める可能性も出てきたのである。これも筋の展開として不自然ではないし、納まるべきところに納まった感じで「物語」としてはよくできているとさえ思う。しかしながら、ある貴族の娘の没落を描こうとしてモーパーッサンがこの作品を書いたのなら、こうした展開が、作品から峻烈さを奪っていることは否めないのである。

こうして、不自然ではないが必ずしも必要でもない筋の展開を、モーパーッサンは、何故採用したのか。そこに彼の「感情移入」を見たいと私は思う。それは『脂肪の塊』同様、「悲劇のヒロイン」の登場と無関係ではないが、この『女の一生』の場合、彼が自分の母親を「悲劇のヒロイン」のモデルにしていることが、より大きな影響を持ったと思われるのである。

『女の一生』は一九世紀前半を舞台にしているが、一八五〇年生まれのモーパーッサンにしてみれば不知の時代であり、彼の作品としてこうしたことは珍しい。これは、モーパーッサンがこの作品の中にジャンヌという一人の女性の生涯を描くのみならず、当時の貴族階級の没落の傾向（産業革命の影響を想起されたい）も描こうとしたという歴史的意図をやることなから、ジャンヌのモデルとして彼自身の母を選んだことによるところが大きい様である。モーパーッサンの母、ロール・ド・モーパーッサンは、高い教養を身につけた婦人であり、後年モーパーッサンが師事するフローベールとも親交があったが、その夫ギユスターヴ・ド・モーパーッサンは、『女の一生』のジュリアンながら女出入りの多かつた人らしく、夫婦は、モーパーッサンが十二才の時に離婚している。彼女は女手一つでモーパーッサンと弟のエルヴェを育てあげたが、モーパーッサンはどうした彼女に強い愛着を抱いていたと言う。こういった事情を考えれば、彼自身の初の長編の女主人公に彼女の面影を映し出し、風俗その他も十九世紀前半という時代設定にしたこともうなずけるのである。

このように自分の愛する母親を「悲劇のヒロイン」としたことが

ら、その主人公なり作品なりに特別の思い入れが入ってころのは、想像に難くない。こうした感情が、モーパーッサンをして、ジャンヌをギリギリまで追いつめさせ得ず、前述のように、いく分甘々の残る筋展開となったのではあるまいか。もしそうなら、『脂肪の塊』のときと同様、完全にモーパーッサンの主観が排除されているとは言えないことになる。自然主義の境界線を踏み越えていることに他ならないのである。

最後にこの『女の一生』について指摘しておきたいのは、随所に見られる美しい情景描写である。この作品はノルマンディー地方をその舞台とするが、その田園的な風景風俗が実に鮮やかに描写されている。これはモーパーッサン自身ノルマンディー地方の生まれであり、その自然の中で幼少年期を過ごしたため、その地方を熟知していたことが資するところが大きいと思われる。このこともまた、彼のこの作品への特別な思い入れと無関係ではあり得ないであろう。風景描写の中でも、とりわけジャンヌが幸福な頃のそれは白眉で、それからロマン小説を讀むようであることは、特筆に値する。それがこの作品に、どこか牧歌的な色合いを添えているのである。

以上のように、『女の一生』には『脂肪の塊』との多くの類似点も見い出せる。女主人公の悲劇を扱いたから、それを冷静に眺めていくだけにとどまらない何かを感じさせる点で、極めて特徴的であると言えよう。そして自然主義的特徴を帯びてはいるが、必ずしも自然主義の作品だと断ずることかできぬ性格というものは、この『女の一生』の方がより強くなっているように思えるのである。

モーパーッサンの死の四五前に書き上げられた彼自身の最後の長編『死のごとく強し』は、彼の創作の最晩期の傑作である。この当時彼は数々の疾病に悩んでおり、死の恐怖や幻覚から必死で逃げられようとしているのであるが、奇蹟にも運命は、ほどなく彼に狂死を以

て生の終止符を打たせることとなる。このように、生み出される背景が異様なためか、この作品は一種独特な暗さを持ち、特異な光を帯びているように思われる。

すでに老境に達しかけている画家のオリヴィエ・ベルタンは、世間での作品の評判もよく、社会的地位は極めて安定していた。彼は今はギュロワ伯爵夫人となつてゐるかつこの恋人アンヌへの思慕が絶ち難く、今もつて独身を過ごしていた。そのギュロワ家と親しくつき合つてゐた彼は頻りに出入りしてゐたが、ある日、伯爵夫人の娘アナネットの中にかつこの恋くアンヌの面影を見出す。彼は次第にアナネットの魅力に夢中になつていくが、その愛情がアナネット自身に對するものなのか、それともアナネットの母親アンヌに對しての若かりし頃の恋慕の追憶なのかわからなくなつていく。そうした母と娘という二人の女性に對する思慕のディレンマに、オリヴィエ自身の「きい」は容赦なくのしかかり、彼は悩みの中に街路で辻馬車にひかれて悲惨な最期を遂げる。

この作品に見られる特徴は、『脂肪の塊』『女の一生』と概ね同じであるが、特別な「悲劇のヒロイン」がいない（ちよつと無理をすれば、アンヌがさうであると言えなくはないが）かわりに、モーパッサンの「感情移入」が一層激しいところが注目される。しかもながら「感情移入」が、前二作のような「悲劇のヒロイン」に對する同情的なものではなく、主人公が作者モーパッサン自身の投影となつてゐるといつた形を表現している点は際だつた相違を見せてゐる。前述のよつに、この作品当時のモーパッサンは尋常ならざる状態だったのであるが、そのことと強い関連があるものと思われる。実際、この作品の主人公オリヴィエ・ベルタンの設定は、非常に実生活のモーパッサンと類似してゐるのである。この当時モーパッサンは三十九才で、年令的に老境といつわけではなかつたのは事実である。しかしながら彼はその四年後に、不慮の事故ではなく、何かに追いつめられて死んだのであるから、オリヴィエ同様、人生の

晩期にあつたことは疑つべくもない。また世間的にも認められた地位にある芸術家という設定もモーパッサン自身を思わせるし、独身を使用人と暮らしてゐるといつたフロットも実生活のモーパッサンと同じである。

このように自分自身と極めて類似した主人公を設定してゐるため、その主人公オリヴィエの愛いはそのままモーパッサンの苦悩であり、オリヴィエのうめき声はすなわちモーパッサンの呻吟であるかのやうな勇固気が、作中に満ちてゐるよつに思われる。特に、オリヴィエが自分の老いを考えやうを得ないところでは、直接モーパッサンの魂の叫びが聞こえるよつなのである。従つてこの『死のごとく強し』は、『脂肪の塊』や『女の一生』より以上に、写実小説といふよりはロマン小説と呼べる作品ではないかと思ふ。

『脂肪の塊』や『女の一生』の中にモーパッサンの「感情移入」が見られる、と私は指摘したのだが、しかしそれはあくまで作品の背後にあるものであつた（見えないといつわけではない。注意深く読めばわかるのだが、表面には直接的には出てこないといつ意味なのである）。ところがこの『死のごとく強し』になると、作者の姿はオリヴィエの姿を借りてまろに表面に出てゐる。「主観の排除」といつ自然主義が標榜してゐたものからは大きく逸脱してしまつてゐるのである。そしてそれは、モーパッサンを「自然主義作家」として見るなら、「自然主義作家」としての自己破壊に他ならぬ。しかしながら、ヒタヒタと迫り来る死の足音を聞いて、彼が思はず自然主義などというよつな文學上の一つの枠を忘れてしまひ、自身を作中に描いたとしたら、それは何よりモーパッサン自身が極めてヒューマンなものを持つてゐるよつこの証明となるのではないか。それが『脂肪の塊』や『女の一生』の中のヒロイン達に對するモーパッサンの同情と同根であることに思ひを巡らした時、キートン・モーパッサンといつ一個の人間としては、自己破壊をしてゐるよつを何でもないのだといつことに気づくのである。

このような『死のこゝろ強し』という作品が、自然主義の作品であるとして、名目上だけでも言えるのかどうか、私には判然としない。しかし、この作品が、『脂肪の塊』にも『女の一生』にも増して、『モーパッサン＝自然主義作家』という図式に欠けているものを示してくれるものであることだけは、確言しておけると思う。

田、ムラノ

これまでモーパッサンの三つの作品をとりあげて、彼の文学の特徴、とりわけ「モーパッサン＝自然主義作家」という図式に欠けている特徴を追求してきた。果たしてどうした特徴が、モーパッサンに固有なものなのかどうか、ここに他の作家と比較することが必要になる。

モーパッサンと比較するに好個の材料となる作家として、ムラノが挙げられる。彼は終始一貫して自然主義の旗振り役であったし、モーパッサンの短い活躍時期は、また彼の活躍ともダブツているからである。その彼の作品の中で最も著名な（ゆえにも、最も勝れた）という意味ではない作品であるところの『居酒屋』を例として、モーパッサンとの相違を考えてみたい。

『居酒屋』の細かい筋展開は割愛するが、結局のところその内容は、ある労働者の家族の没落である。その没落の様が、克明にこれでもかこれでもかというように巧なく、醜く、下劣に描かれているのである。その意味では明らかに悲劇である。しかし、この中には「責任なき悲劇」は存在しない。『脂肪の塊』や『女の一生』のヒロイン達と異なつて、一家の没落はすべて自業自得なのである。女主人公のシエルヴェーヌは以前に別れた男と再び関係を持つようになるし、その夫のクローポーは仕事にけがをしたため、次第に海邊りのくつたらになつていく。そうしたことを通じて、この一家は子供らとともに悲惨にも転落していく。一家離散のような状態になつて

遂にクローポーは精神病院で狂死、シエルヴェーヌは街路で野たれ死にという末路をたどるのである。従つて筆者は、同情の裏よりも何よりも、まず嫌悪感を抱かざるであらう。モーパッサンの作品に見られたような、しみじみとしたロマン性を見出すことは難しいのである。ムラノとモーパッサンの相違として、まず第一に指摘しておきたいことである。

この『居酒屋』の中で、ムラノは恐ろしいほどまでに冷酷に没落を描き切る。そのすばらしい才能は確かに賞讃に値するが、その裏、一個の人間としてのムラノは、その作品そのものからは多少かぶりがつて来ない。精密な機械のようであり、同情と叫びたような「感情移入」はない。彼の主観はきれいに排除されているのである。モーパッサンが、『脂肪の塊』の中の鴉婦や、『女の一生』の中のシヤンヌや、『死のこゝろ強し』の中のオリヴィエに対して、間接的にしろ直接的にしろ、自然主義を遠脱したような同情や共感を随所ににじませているのと対照となつて、このことを第二に指摘しておかねばならぬ。

ムラノといふ人物が、非人間的で感情のない、冷血動物のような人間であったとは思われない。例えば、ドレフューヌ事件に際しての彼の行動を思い出せば、それは証明されるであらう。ただ問題にしたのは、彼が当時の労働者といふ下層階級を描くに際して「上から下を見下した姿勢があった」のではないかということである。彼の心の底には、労働者に対する一種の軽蔑のような感情が、本人の意識していかどうかは別にして、あったのではなからうかということなのである。

例えば、この『居酒屋』もその中の一編であるところの『ルーゴン・マツカール双書』という企てにしてからが、そうなのではないか。これは、構成的にはあるいはバルザックの『人間喜劇』に想を得たものかも知れないが、内容的には、ある家系の歴史を遺伝や社会的環境から直つたものである。その意味では、「史証的自然科学

的方法の導入」という自然主義の主張の一つの具現ではある。しかし、このソラはあまりに遺伝や環境による影響を重視しすぎているのではないか。いかに遺伝的に劣悪な形質を受け継ぎ易く、また育つ環境が良くないからといって、人は必ず転落していくものだとはいえない。人によつては、そうした逆境に耐えて立派に成長することもあろうし、たとえ偉人にはならないまでも、誠実な一生をまかるといふことは、十分考え得ることであらう。その可能性をソラは、遺伝や生活環境の過度の重視によつて抹殺してしまつてゐる。それが、もし、「知的シエールもあまり高くない労働者階級ならば、女者の思惟環系をたゞつても当然だ」といふ思い込みによるものだとしたら、当時の労働者に対する看過できない輕侮ではないかと思ふ。

『居酒屋』の展開の中で欠かすことのできない一つの契機として、クーホーのけががある。これによつて彼は、まじめだったそれ以前の生活態度を變じて酒浸りの自堕落な生活をするようになり、更生の努力も挫折して遂に一家は転落の坂道を駆け落ちることになるのである。これとても、私には遺伝の過度の重視と労働者に対する思い込みによる産物のようと思えてならない。クーホーは結婚後、シエールや子供たちと仲睦まじく、貧しいながらも充実した生活をしてゐたのである。それが仕事でけがをしたからといって、酒浸りのぐうたらな男になりさがるものであらうか。しかも彼のけがといふのは、子供の方に顔を向けて応えようとした時に足場から落ちたものである。それほゞまさに子供を思つ優しい男のあのよつな豹変ぶりには、筋の展開としていかに不自然ではなからうか。「彼は道徳的にさうなつてしまふ、弱い性格だったのだ」とソラが説明するのであれば、私はさうした考え方に強い反感を感じるものである。

ところがモーパッサンには、さうした下層階級の者に対する輕侮の念は、作品からは感じとれない。『脂肪の塊』の中の鴉棉に対し

てモーパッサンは、逆に大いなる慈しみをもちて接している。ソラのような姿勢は感じとれない。前述したように、モーパッサンはむしろ上流階級の者に対して手ぎびしい批判をし、下層階級の者には限りない愛情を注いでいるのである。やはり鴉棉の登場する『テリ工館』についても同様のことが言える。さういつた点を考慮するなら、モーパッサンとソラとの相違はより明瞭になるであらう。

モーパッサンの特徴として指摘したことが、ソラとの大きな相違点であることを述べた。それが自然主義の旗振り役として似つかわしいソラと、さうでないモーパッサンといふ点に關係してくるのは言つてもないはずである。ただ、急いで付け加えておきたいのは、私は決してエミール・ゾラという作家を低く評価してゐるのではないといふことである。その獨創性といい、描写力といい、また問題の社会性といい、まず最大級の作家の一人に数えて良いと思つてゐる。言いたいのは、モーパッサンとは非常に肌合ひの遠く文學をやる人なのだ。といふことだったのである。そのことによつて、モーパッサンの文學の特徴がより明瞭になつたのではないかと思ふ。

五、自然主義の落として

「モーパッサン「自然主義作家」といふ四式に欠けているものは何か。その追究が、この小論の目的であつた。私はモーパッサンが自然主義作家ではない、と言つておちひはない。たださういつたあまりに簡単な類別が見落としておちひなものを、指摘しておきたかつたのである。

モーパッサンは一八五〇年の生まれである。おりしも十九世紀後半に移ろつとする時、フランス文壇は写実主義台頭の途にあつた。しかも彼の母はフローベールとの親交があつたのである。モーパッサンが「自然主義作家」となつたのは、周囲の状況からすれば当然

のことであつたらう。しかしながら、彼がもし十八世紀の後半に生まれていたらどうであつたらうか。私には、滅々たるロマン派作家になつたやうに思えてならない。そこでその方が、あるいは、ひょつとしたら、彼にどうして幸ひであつたのではあるまいか。彼の、自然主義的特徴とロマン的特徴のアマルガムのやうな作品を讀むにつけ、そう思うのである。

人は誰を「時代の子」たるを免れ得ないと言ふ。あの大詩人ニーチェの、超時空的思想にこそ、十九世紀後半といふあのやうな時代なればこそ生まれ得たのであつて、他の時代なら決して生まれ得なかつたのである。同様に、モーパーッサンといふ作家もあの時代なればこそ作家であり、その意味では「時代の子」であると言えよう。しかしながら、彼は自然主義全盛といふ時代の「申し子」ではなく「落し子」ではなかつたのか、決して幸福にはなり得ない「落し子」のイメージ——私のモーパーッサン像には、いつもそれがついてまわるのである。

モーパーッサンは悲しい作家である。人間の愚かさ、人生のむなしさを誰より知りつくし、ペンで人間や人生の断面をサククリと開き示して、揶揄し嘲笑し罵倒し尽くしたあげくに狂死する。それは「落し子」の生にふさわしく暗く、悲しいものである。その生を生き終えようとした「落し子」が、今者の際に「暗い／＼ああ、暗い／＼」と叫んだことを知る時、モーパーッサンの作品の感動は、余人をもつて替え難いものになるはずである。

モーパーッサンの作品はアマルガムであると言つた。その結果として、作品が中途半端な印象を与えるところも、まさにそれこそがモーパーッサンの魅力であるといふことは、「落し子」に対する、天のせめてもの慈悲なのであろうか。

(53) (I)

発刊に際して

駒場にたえずみ、ふと思ふ。自分は一体何なんだろう。何故ここに在るのか。駒場ってどんなところだろう。実はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通りすぎていく時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いている場所を直視しよう」。ここから恒河沙は出發する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切に、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まつた我々の考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えて行くものであり、決して、政治的なプロジェクトや、行動によつて作り得るものではない。それでいて文化は、それらすべてを包摂し、落し込ませこまう総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが実は文化の最上の担い手といえるだろう。

しかし現状を考へると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場に在る個人にはコミュニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのでないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我々の時代の文化を最前線から支えよそのとして、無検閲・無修正を原則としてその紙面を広く公開し、コミュニケーションの中から、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

完 終 了
End
Ende
Fin
Fine

豪華賞品が当たる
●

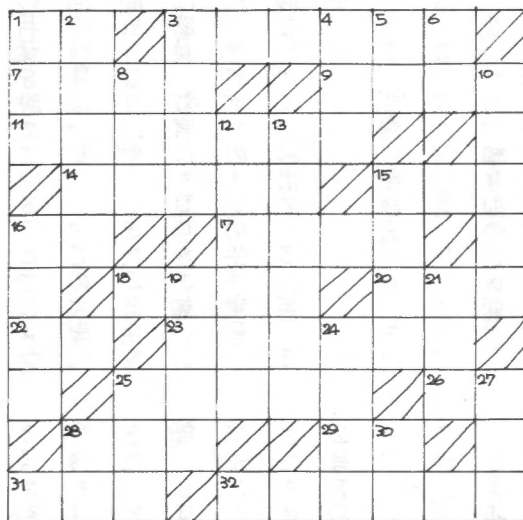
先着8名様に

奇怪

クロスワードパズル

NO.3

1等 ニッサン
フェアレディ
240 1名
Σ



2等 高級万年筆
2名

3等 恒河沙才4号
5名

応募は郵送に限ります

ACROSS

- 1 コイ
- 3 誰でももらえます
- 7 コンクラーベ
- 9 刃物とヤスリのセット
- 11 漱石に因んで
- 14 猫
- 15 議員の場合は20歳増し
- 16 本能
- 17 運動会
- 18 マリオネット
- 20 住宅から消えつつあるもの
- 22 踏む
- 23 シャンパン
- 25 敗者復活戦
- 26 抹茶ジュース
- 28 シッポ
- 29 おさまるところ
- 31 瞬間
- 32 除夜の鐘

DOWN

- 1 サマンサの娘
- 2 山谷
- 3 高校6年生
- 4 系
- 5 女と家
- 6 釣
- 8 前略
- 10 新聞
- 12 ありそうでない交通標識
- 13 彦根藩主
- 15 大小
- 16 むかし
- 19 スルメ
- 21 踏んじゅだめ?
- 24 鉄筆
- 25 豆まき
- 27 火消し
- 28 30歳
- 30 トンボ

〒170

宛先 豊島区巢鴨1-1-3 小山方 時代錯誤社

恒河沙3号をお届けします。駒場もフレッシュマンを迎えて、すでに一年間（或いはそれ以上！）駒場で目を送った2年生も、また新たな気持ちで銀杏の若葉を眺めていることでしょう。

今回の特集は「私にとっての大学」。一年間自分なりにやってきた2年生を中心に職員・教官にも原稿をお願いしました。それぞれのナマの生活実感、大学観などにじみ出ていると思いませんか。

さてさて、問題の座談会。言いたいことはかなりスバズバ言ったつもりですが、なにせわが編集部の口の悪さ、

後「冗談好きなどというものをほるかに超越した」「病氣的体質」は自他ともに認めるところで、あれでも文章にするに

編 あたってる重にも4重にもオフライトをかけたつもりでして……。それはとも

かくとして、内容的にもさまざまな感想や意見・批判があると思いません。卒直なところをどんどんお寄せ下さい。

ところで新入生の皆さんにはこの3号が初おめみ之というわけですね。今後毎月刊ベースでしっかりやっていきたいと思っておりますのでよろしくお願ひします。この3号はお読みになってくださればわかる通り、前号をふまえたものが多いので、新入生に限らず2号をお読みになっていない方は、バックナンバーがありますので御申込み下さい。

なお本号より読みやすさを考えて印刷・製本を外注に出したため、コストの関係上、一部脚元に値上げせざるをえませんでしたが、読者のみなさんの御理解をいただきましたと思います。では、

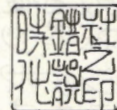
【酔】

恒河沙 No. 3

定価 150円

1979年4月5日発行

編集・発行 時代錯誤社



〒170 豊島区巢鴨1-1-3 小山方

* なまものですのでお早目にお読み下さい。